

<神々の真相 4>

<神々の真相 1~3>では、すべてはマルドゥクの野望が原因で、核戦争を含むあらゆる災いが発生したことが判明した。特に、婚約者をマルドゥクの奸計により失ったイナンナとの確執は凄まじい。他にも、マルドゥクが偶像崇拜の根源であり、イナンナと共にサタン（ルシファー）の原型であることも述べた。そして、核戦争後にマルドゥクは全アヌナキに君臨する「神」となり、あらゆる神話・伝承を自分にとって都合が良いように改竄した。当然、人類の「神々」に対する理解は混乱して様々な誤解が発生し、現在まで引き継がれる偶像崇拜、サタン崇拜の原因となってしまった。

そこで、ここでは偶像崇拜、サタン崇拜について詳しく検討する。それが、アトランティスなどの超古代文明やイエスの真相を解く鍵にもなるからである。

1：マルドゥクとイナンナに関連するまとめ

最初に、マルドゥクとイナンナに関連する関連事項をまとめておく。

- ・マルドゥクが地球人女性サルパニトと結婚したことが原因で、200人のイギギが反乱した。ラームから全イギギがやって来たわけではないが、ラームの指導者マルドゥクはエンキやエンリルに反論してまで、ニビルの権利をすべて捨ててまで（掟に反してまで）、地球人女性を正式配偶者とした。これは、イギギの反逆として象徴される。つまり、マルドゥクにより全イギギ 300人が地球上のアヌナキ 600人に対して反逆したと象徴される。これこそが、天使の1/3を味方につけたサタンが天界で反逆したことの原型である。
- ・イギギの指導者シャムガズの計略により、マルドゥクの息子サツ（セト）が兄弟アサル（オシリス）を殺害した。これが原因でサツとアサルの息子ホロンが戦い、サツが追放された。この話が、マルドゥクの都合の良いように改竄され、エジプト神話となった。
- ・マルドゥクの奸計により、イナンナの婚約者ドゥムジが死んだ。それがきっかけでマルドゥク一派とエンリル一族のピラミッド戦争が起こり、マルドゥクはピラミッドに生きてまま幽閉された。救出の任務を負わされたのは、設計者のニンギシュジッタである。救出されたマルドゥクは追放された。
- ・イナンナはドゥムジの遺体を埋葬するために、遺体が安置され、姉エレシュキガルが管理している“下の方のアブズ”に引き取りに行った。しかし、姉はイナンナを疑い、7つの門毎に装具と武器を1つずつ取り上げ、姉の前に衣服を脱がされて引き出された。そして、イナンナは杭に吊されたが、エンキの密使により“死んだ”はずのイナンナは蘇った。
- ・マルドゥクは邪悪な蛇と呼ばれた。中東からヨーロッパの神話で、牡牛が戦っている蛇は“邪悪な蛇”である。

- ・マルドゥク追放後のエジプトに対して、イナンナは亡くなったドゥムジの継承権を主張した。しかし、エンキとエンリルは決めかねたので、アヌが来訪した。イナンナはアヌに気に入られ、アヌが地球を視察するために使う船を持参金として与えられた。それに対して、イナンナは喜び踊り歌った。彼女のアヌへの讃歌は、やがて聖歌として口ずさまれることになった。
- ・マルドゥクはイギギらと共にバベルの塔を建造したが、エンリル一族により、完膚なきまでに叩きのめされた。
- ・イナンナの都市ウヌグ・キに王権が移譲されると、人々はイナンナに次のような賞賛の聖歌を贈った。“キラキラとまばゆい“メ”のレディ。正義に適い、光を纏った、天国と地球に愛されし者。アヌの愛によって聖別され、敬愛を一身に集め、彼女は7度“メ”を獲得し、手に備えている。それらは王権のティアラに相応しく、高位の司祭職に相応しい。偉大なる“メ”のレディ、彼女はその守護者！”
- ・マルドゥクの妬みにより、ニンギシュジッタはアメリカ大陸へ渡ることとなり、ケツアルコアトルと呼ばれた。ニンギシュジッタはマルドゥクが追放されていた時期、地球人を娶ったアヌンナキの子孫の助けを借りてエジプトで国を監督し、“崇高な神”として崇拜されていた。そして、かつてマルドゥクが計画したことは撤回され、隠しておいたものを破壊し、“陰陽”の概念を導入した。ならば、この時点でピラミッドの内部に“死と復活”を象徴する石棺が置かれ、ピラミッドが双子山から3つになった可能性がある。
- ・エジプトでは、アヌンナキはネテル（ネフィリム）、マルドゥクはラー、エンキはプタハ、ニンギシュジッタはテフティ（トート）として想起された。特に、ニンギシュジッタについての記憶を消すため、マルドゥクはスフィンクスの姿を、自分の息子ナブの姿に変えた。スフィンクスの別名はセシェプ・アंक・アトゥムで、最高神アトゥム・ラーの生きた像、という意味であるが、神話と共に、事実が相当改竄された。
- ・特に、ニンギシュジッタは呪文でイシスの姿を隠したり、ホルスに向かって呪文を唱え、仮死状態のホルスが息を吹き返したりと、魔術・妖術の原型とされてしまった。これも、ニンギシュジッタを陥れようとするマルドゥクの策である。そして、ニンギシュジッタはグノーシス主義のヘルメス思想に於いてトート・ヘルメス・トリスメギストスとされてエノクと同一視され、あらゆる秘教の大元とされてしまった。彼は天使との会話にエノク語を用いたといわれ、至高の力と叡智をもたらす呪文とされたが、その典型がエジプト黒魔術（後の西洋黒魔術の根源）であり、エノク書である。特に、エチオピア語エノク書は、デーモンについてのハンドブックとして、重要な魔術書の1つに数えられている。エノク語で諸霊を操る魔術をエノク魔術と言う。

- ・マルドゥクはアヌの街、ヘリオポリスのエンキ神殿に、自分の使っていた宇宙船の先端部をベンベンと名付け、それを、毎年新年の 1 日だけ、王に捧ませ、偶像崇拜させた。マルドゥクこそ、偶像崇拜の根源である。
- ・エンキはあらゆる種類の“メ”をマルドゥクに与え、あらゆる種類の知識を授けたが、唯一、“死者を蘇らせること”は教えなかった。ならば、マルドゥクが“死と復活”を象徴する石棺及び 3 つ並ぶピラミッドとその意味について知る由も無いから、石棺ともう 1 つのピラミッドはニンギシュジッダが造ったと考えるのが妥当である。
- ・エジプト神話はすべてマルドゥクにとって都合が良いように構成され、真相は改竄された。後に、メソポタミアの神話もマルドゥクにとって都合の良いように改竄された。よって、神話や伝承だけに頼っていても、真相に近づくことはできない。つまり、口頭伝承を基本とするカッパーラだけでは、真相に辿り着くことは困難である。
- ・イナンナは第 3 の地域アラタ＝インダス地方を与えられた。しかし、イナンナは既にエンキから幾つかの“メ”を奪い取っていたので、エンキは文明化された王国の“メ”をその地域に与えず、完全な文明は花開かなかった。
- ・イナンナは若い女神であり、イシュタル、ヴィーナス、アフロディーテなどの別名を持つ。その美貌でアヌの愛人となり、“アンニツム (アヌの最愛の人)”と呼ばれた。それ故、王位継承順位数はウツの 20 に継ぐ 15 であり、叔父であるイシュクルの 10 よりも上である。また、その美貌を利用してエンキに取り入って騙し、エンキから“メ”を盗み出すことに成功した。このような理由から、イナンナは誘惑する裸の女神として描かれていることが多い。しかし、後にマルドゥクが“正統だ”と主張して王位を奪い取り、バビロニアの主神となると、イナンナはウルクを追われ、以後、武装した戦う女神となった。
- ・イナンナはウヌグ・キにギグヌ、“夜の愉しみの家”を設置し、若い英雄の結婚式の夜に誘い出し、彼女と寝ることにより、長生きと至福の未来を約束した。(“聖なる結婚”の儀式。) 彼らは朝になると、彼女のベッドで死んでいた。これが、後のあらゆる宗教に於ける性的退廃の原型となるものである。つまり、イナンナはサタンの原型の一部である。
- ・“聖なる結婚”の儀式で死ななかった者がいた。英雄バンダ、ウツの曾孫である。それにより、イナンナは不死の力を手にしたと思込み、自分のことを女神イナンナ、“不死の力”と呼ぶことにした。しかし、彼女と双子の太陽神ウツは困惑し、エンキとニンプルサグは「死者を蘇らせることなど、不可能だ!」と言った。なお、イナンナの名は、イルニンニ→アンニツム→イン・アンナ→イナンナとなっている。

- ・マルドゥクはドゥムジの領地奪還を仄めかすイナンナの夢や幻影に彼は動揺し、その企てに対抗することにした。
- ・マルドゥクは、“死と復活”の問題に、熟考すべき点が多いことに気がついた。そして、“神の神性”という概念は彼の興味を大いに惹き、自分自身が偉大な「神」になると宣言した。
- ・マルドゥクは、王や民の忠誠を維持するために、“来世で神の国に行き、そこで復活できる”という死生観を植え付けた。これは、ウツが玄孫ジウストラを“二輪戦車の場所”へ導いたことに依る。そして、復活するためには肉体が必要だから、ミイラという保存方法が開発された。つまり、マルドゥクの言う“死と復活”の問題とは、このようなことであり、イエスに関連するような“死と復活”ではない。また、“来世への旅”を記した長い本をでっち上げ、「死者の書」とした。
- ・マルドゥクの野望、“ティルムンの土地”シナイ半島にある宇宙空港を支配し、地球に君臨する神となることに、彼の兄弟たちですら、非常に警戒した。
- ・マルドゥクがバビロンに強引に神殿を建造すると、怒ったイナンナは彼の手下を手当たり次第に殺した。
- ・マルドゥクは国から国へと歩き回り、自分の最高権力について人々に話し、自分の信奉者を獲得しようとした。彼の息子ナブは人々を扇動し、第4の地域を奪おうとしていた。マルドゥクはあらゆる「神々」の上に自分を君臨させ、彼らの力と属性を、勝手に我が物のように語ったが、これがバアルの原型であり、偶像崇拜の原型である。これにはエンキも激怒した。マルドゥクは天が覇権を示していることを主張したが、実際にはまだエンリルの時代だった。マルドゥクの主張に対抗するため、指導者たちは人々に空の観測の仕方を教えるようニンギシュジッタに頼み、ニヌルタとイシュクルの助けにより、世界各地にストーンヘンジを造らせた。また、ナブは神＝マルドゥクの言葉を伝える役割である。選ばれた人間へ「神々」の秘密を伝授することが、司祭職、すなわち「神々」と人間の仲介者の血統となった。そして、御神託は前兆を探して天を観測することと混ぜ合わされた。来るべきことを宣言する「神々」の代弁者をナービー（ナビゲータ）と言うが、これはマルドゥクに代わって、天空の印がマルドゥクの主権到来を示していることを人類に確信させようとした、ナブのあだ名である。
- ・マルドゥクの“自らが神として君臨する時代となった”という宣言がきっかけとなり、エンリルの息子ニヌルタとエンキの息子ネルガルがソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボイム、ベラ（ツォアル）の王たちが同盟を結んだシディムの谷＝塩の海を核攻撃した。それが原因で、シュメールは“死の灰”に覆われ、滅亡した。しかし、マルドゥクが望んだバビリだけは核の影響を受け

なかったので、エンキ、エンリルはマルドゥクの支配権を認め、マルドゥクがバビロニアの主神として君臨するようになった。

2：バビロニア神話—シュメール真相の改竄例

エジプト神話は最初からマルドゥクによる創作であるが、シュメールの真相はマルドゥクによってどのように改竄されたのか。古代シュメール神話では、頭に2本の角がある「神々」が天と海から現れたと伝えられ、天からの神はエンリル、海からの神はエンキである。そこで、この2人について、バビロニア神話と合わせて見てみる。バビロニア神話とは、マルドゥクの都合の良いように書き換えられた、シュメールの真相のことである。

<エンキ>

・天神アヌの息子であり、女龍ティアマトを倒したバビロニアの主神マルドゥクの父である。最初はティアマトとの戦いに敗れたが、マルドゥクの勝利後、海神となった。エリドゥに水神として祀られる創世神の1人であり、人間を「神」への奉仕者として創造した。水神であるのは、人間がまだ野獣のような生活をしてきた時代に海から現れた=宇宙船が海に着陸してそこから現れたことや、その姿が半人半魚で双頭（おそらく人と魚）であった事に由来している。また、ネフィリムの宇宙船は、最初は“天の船”と呼ばれていたから魚で象徴され、更に、最初に地球に降臨したのが魚座の時代の始まりだったこともある。水を司る蛇（龍）神としても象徴される。

海から出現したエンキは、それまで知性を持ち合わせていなかった人類に手工芸や文字、法律、科学技術、建築といった文明の基盤となるすべて=「知恵」を、たったの1日にして教え、再び海へと消えていった。

エンキはシュルツパクの敬虔な王ジウスドラに警告を発し、箱舟を造らせ、大洪水によって人類が完全に絶滅するのを回避させた。

本来の地球の支配者とも言われ、三日月と関連させ、“ニニギク、ニンイギク（目の清い神）”と言われる。

*エンキについては、さすがにマルドゥクが歯向かえない父、“地球の主”だけのことであって、大筋に於いて改竄されていないが、太陽系創世神話に絡め、マルドゥクの勝利後に海神になったことにされた。そして、海へと消えた。それが、ギリシャ神話ではポセイドンとなり、日本では綿津見神となる。

ただし、“その姿が半人半魚で双頭であった”などという表現はそのまま捉えられ、半人半動物のような神々の神話が芽生えた。これなど、誤解・曲解が生じる原因の一例である。

<エンリル>

・その1：

天神アヌと地の女神キによって生まれた地上神で大気の神で、創世神の1人。「神々」の身代わりとして労働する人間を創造するために、母親であるキと交

わった。“キ”とは、シュメール語で“地球”を意味する。バビロニア神話では、この母子婚によって人間が生まれたとされている。

*エンリルはエンキによる労働人類を創造することに反対だった。そして、母親とも交わったりしていない。あるいは、人類創造という点では、創造の母たるニンフルサグとも取れ、彼女と関係があり、息子ニヌルタが生まれている。しかし、ニヌルタは「神」の1人であって、人間ではない。つまり、マルドゥクが憎んでいた一族の総帥であるエンリルを陥れる根源神話である。

しかし、普通に読めば、エンリルとその母による“母子婚”という忌まわしい関係により人類が創造されたことになり、性的退廃を正当化する根源神話の1つである。

・その2:

異教徒の代名詞で、偶像崇拜が盛んだったフェニキアでの主要三神の1人で、父なる神として知られる。シドンにおいては“バアル”と呼ばれていた。フェニキア人の神話に於いては、強さと創造力を象徴する“牡牛”で表現される。エリオン（至高の者＝オリオン？）とも呼ばれていた。嵐、雷、稲妻の神である。兄弟で海の王子ヤムは、バアルを降参させるために「神々」の会議に使者を送って威圧した。その勢いに「神々」は驚き、「神々」の長エルでさえも要求を受け入れ、「おおヤムよ、バアルは汝の奴隷である」と宣言した。

フェニキアでは、エルとその妻アシェラ、及びその息子のバアルという構造、そしてエルに直接願いを掛けず、アシェラやバアルに願いを掛ける。また、バアルは妹アナトとも交わっている。

*バアルの本来の名前の意味は、主神エル＝アヌの息子の名前、ということで、地球の実質支配者エンリルのことである。エンリルの象徴は確かに牡牛であるが、嵐、雷、稲妻の神は彼の息子イシュクルの象徴である。これは、後にマルドゥクが全アヌンナキに君臨すると宣言し、あらゆるアヌンナキの性質を合わせた結果、エンリルとイシュクルの象徴が一体となってしまったのである。また、兄弟で海の王子ヤムはエンキのことである。つまり、バアルとは元々エンリルのことを指している。これは、エンリルがお気に入りだった“着陸場所”の名称が“バアルベク”となっていることから解る。

この辺りは、後にマルドゥクが自らを全アヌンナキに君臨する「神」として崇拜するように扇動した、カナーン＝フェニキア地区である。聖書では、ヘブライの民に約束された地がカナンであるが、その住民は姦淫や偶像崇拜に溺れていたのだから、主は注意を喚起している。つまり、“父なる神バアル”として知られたエンリルの性質が、マルドゥクに取って代わられ、典型的な偶像崇拜の悪神バアルとされてしまったので、主は注意を喚起したのである。ならば、偶像崇拜させるようにしたのはマルドゥクに他ならない。それは、ヘブライ語でバアルはマルドゥクを意味することからも、裏付けられる。

また、エルとその妻アシェラはバアル＝エンリルの両親だから、エルはアヌ、アシェラはアンツである。しかし、アシェラ＝アスラ＝アシュタルテ＝アシュ

トレット＝イシュタルで、いずれもイナンナの別名である。そうすると、“エルとその妻アシェラ、及びその息子のバアル”というのも改竄であることが解る。この地域はエンリルがイシュクルに与えたから、主神は嵐、雷、稲妻の神イシュクルである。つまり、エルとしては実質イシュクルが相当する。そして、イシュクルはイナンナと仲が良かったから、その妻アシェラがイナンナとなり、彼らの息子バアルとして陥れられたのがエンリルである。これだけ見ても、事実関係がマルドゥクによって相当改竄されていることが解るだろう。アシェラの実態はこのようにイナンナであるが、旧約の申命記 7. 1～5 には次のように記載されている。

“あなたの成すべきことは彼ら（ヘト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人）の祭壇を倒し、石柱を砕き、アシェラ像を粉々にし、火で焼き払うことである。”

つまり、マルドゥクと最も敵対関係にあったイナンナと、彼女の一族の総帥エンリルを邪神として陥れるため、マルドゥクが真相を改竄したのである。“アシェラ像を粉々にし、火で焼き払う”ように言っていることから、アシェラの名の下に、相当酷い偶像崇拝が行われていたことが伺える。（火で焼き払うことは、清めの意味である。）

なお、アナトはニンフルサグのことである。ニビルでは異母妹との結婚は認められていたので罪ではないが、表面的に読むと、バアルは実の妹アナトと交わった退廃的存在としか取れない。これも、マルドゥクによる真相改竄である。

このように、創世神話からして忌まわしい近親相姦を肯定しているので、偶像崇拝では性的退廃・狂乱が付き物になっている。

・その 3 :

天の「神々」は天と雨を支配し、海の「神々」は海と地、川を支配していた。ある時、天の「神々」が地上を支配しようと天から降りて来た。その為、地上では天の「神々」と地上の「神々」との永き戦いが起きた。戦いは天の「神々」が勝利し、敗れた地上の「神々」は東の地へと去っていった。天の「神々」は人類の前に現れ、天と地を支配した。

*天の「神々」は牡牛の「神々」、海からの神々は蛇（龍）の「神々」として知られ、上記のような神話は世界各地に存在する。そして、シュメールを境にして西では牡牛が、東では龍や蛇が「神」として崇められている。例えば、ギリシャ神話ではゼウス（牡牛）がティフォン（蛇）を破り、ヒッタイトでは蛇は邪悪な神と見なされている。インドでは両者折衷で、蛇神であるナーガとナーギが世界を創造し、牛も神の使いと見なして食べない。それよりも東では、龍神や蛇神が世界を創造したり、“善”なる存在である。

前述のように、蛇の正体はエンキ、牡牛の正体はエンリルである。文字通り取れば、エンキが調査していた地球にエンリルが降り立ち、地球の監督者となったことである。ただし、エンキは東の地へと去ってはならず、アフリカが領

地なので、その点が矛盾する。あるいは、この場合の蛇＝海神をニンギシュジッダ、牡牛＝牡羊＝天神＝マルドゥクとすれば、両者の対立を避けるために、ニンギシュジッダがエンキの勧めによりアフリカの東＝南北アメリカ大陸へ渡ったことと見なすことはできる。

また、“天の「神々」が地上を支配しようと天から降りて来た”のだから、これは地上に領地を求めたイギギと見なすこともでき、そのトップはマルドゥクであった。

これらはほんの一例であるが、如何に真実が改竄されているのか、良く解るだろう。根源となるシュメールの神話でさえこの通りなのだから、他の様々な神話や伝承がどれほど歪んでいるのかは、言うまでも無い。

3：偶像崇拜

ここで、改めて偶像崇拜とは何なのか、検討する。本来、聖書に於ける絶対神は語ることもできず、形に表すこともできないので、便宜的に YHWH などと表しているに過ぎない。つまり、具体的なものとして表現することができないのである。それを、何らかの物によって代用し、崇拜するのが偶像崇拜である。あるいは、YHWH 以外の「神」などを崇拜するのも偶像崇拜である。

例えば、モーゼがシナイ山に籠って十戒を授かっている時、ヘブライの民は待ちきれなくなつて金の仔牛の像を作り、それを拝み、その前で乱痴気騒ぎを起こして主とモーゼの怒りを買ってしまった。この金の仔牛像が偶像であり、乱痴気騒ぎが偶像崇拜に伴う儀式である。あるいは神殿に於ける別の「神」の像、更には仏像に至るまで、偶像である。YHWH 以外の「神」などは、拝むための像を作ってもかまわないから、やはり偶像である。

偶像崇拜の大元は、アヌの街、ヘリオポリスのエンキ神殿に、自分の使っていた宇宙船の先端部をベンベンと名付け、それを、毎年新年の 1 日だけ、王に拝ませたマルドゥクにある。それが、彼が全アヌンナキに君臨し、いつしか「神々」が姿を見せなくなった時から、「神」を象った像へと変遷していったのである。

偶像を英語で言うと“idol”であるが、芸能人や映画スターも同じ“idol”で、崇拜される者（物）、という意味であるから、そのようなものにのめり込むと、何も見えなくなってしまう。所詮、創り上げられたものに過ぎない。

さて、偶像崇拜には人身供犠や性的退廃が付き物である。メソポタミアの古文書には、次のような記述が見られる。

“第 3 シャアトタムがやって来た。人々の姿は飢えのために変わってしまった。(中略) 第 6 シャアトタムがやって来た時、人々はその娘を食事のために用いた。子供を食物にしたのだ。1つの家族が他の家族をむさぼり食った。”

この文書については、<神々の真相 1>でも触れた。シャアトタムとは、“死

の時の進行” のことであるが、アッシリアの古文書では“アヌの 1 年に相当する”と書かれているから、“シャル（ニビルの 1 年＝地球の 3600 年）” のことである。つまり、ある時代から数えて 3 シャル、…、6 シャル、ということである。そして、その時代とは、アヌナキが地球人と結婚し始めたマツシャルの時代から、ジウスドラが生まれる時代までのことを言っていると見なすのが妥当であった。

大洪水に向かって地球の環境は激変し、確かに食糧は減りつつあったが、“主エンキの御言葉” のタブレットには、人類が共食いするような状況は記載されていなかった。そのタブレットには、「神々」にとって極めて不利益な露骨な感情でさえ記載されているが、“共食い” などという記載は無いのである。つまり、大洪水前には、まだ“共食い” という行為は無く、マルドゥクによる改竄と思われる。しかし、旧約には“共食い” に繋がる人身供犠や性的退廃に関する偶像崇拜の様々な記述が見られる。

- ・姦淫してはならない。（出エジプト記）
- ・彼ら（ヘト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人）がその神々を求めて姦淫を行い、その神々に生贄を捧げる時、あなたを招き、あなたはその生贄を食べようになる。あなたが彼らの娘を自分の息子に娶ると、彼女たちがその神々と姦淫を行い、あなたの息子たちを誘ってその神々と姦淫を行わせるようになる。（出エジプト記）
- ・あなたは鑄造の神々を作ってはならない。（出エジプト記）
- ・いとうべき性関係（レビ記）
- ・人の妻と寝て、それによって身を汚してはならない。自分の子を 1 人たりとも火の中を通らせてモレク神に捧げ、あなたの神の名を汚してはならない。私は主である。女と寝るように男と寝てはならない。それはいとうべきことである。動物と交わって身を汚してはならない。女性も動物に近づいて交わってはならない。これは、秩序を乱す行為である。（レビ記）
- ・占いや呪術を行ってはならない。（中略）霊媒を訪れたり、口寄せを尋ねたりして、穢れを受けてはならない。（レビ記）
- ・あなたたちは偶像を作ってはならない。彫像、石柱、あるいは石像を国内に建てて、それを拜んではならない。（レビ記）
- ・それでも、まだ私の言葉を聞かず、反抗するならば、私は激しい怒りをもって立ち向かい、あなたたちの罪に 7 倍の凝らしめを加える。あなたたちは自分の息子や娘の肉を食べようになる。私はあなたたちの聖なる高台を破壊し、香炉台を打ち壊し、倒れた偶像の上にあなたたちの死体を捨てる。（レビ

記)

- 墮落して、自分のためにいかなる形の像も作ってはならない。男や女の形も、地上のいかなる獣の形も、空を飛ぶ翼のあるいかなる鳥の形も、地上を這ういかなる動物の形も、地下の海に住むいかなる魚の形も。また目を上げて天を仰ぎ、太陽、月、星といった天の万象を見て、これらに惑わされ、ひれ伏し仕えてはならない。それらは、あなたの神、主が天の下にいるすべての民に分け与えられたものである。(申命記)
- あなたが行って所有する土地に、あなたの神、主があなたを導き入れ、多くの民、すなわちあなたにまさる数と力を持つ7つの民、ヘト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人をあなたの前から追い払い、あなたの意のままにあしらわせ、あなたが彼らを撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではならない。(中略) あなたのなすべきことは、彼らの祭壇を倒し、石柱を砕き、アシェラの像を粉々にし、偶像を火で焼き払うことである。(申命記)
- しかし、あなたの神、主は彼らをあなたに渡し、大いなる混乱に陥れて、ついに滅ぼされるであろう。また、彼らの王たちをあなたの手で渡されるであろう。あなたは彼らの名を天の下から消し去るであろう。あなたに立ち向かうものは無く、あなたはついに彼らを滅ぼすに至るであろう。あなたは彼らの神々の彫像を火に焼かなければならない。それに着せた銀または金を貪ってはならない。これを取って自分のものにしてはならない。そうでなければ、あなたはこれによって、畏にかかるとであろう。これはあなたの神が忌み嫌われるものだからである。(申命記)
- 預言者や夢占いをする者があなたたちの中に現れ、印や奇跡を示して、その印や奇跡が言った通り実現した時、「あなたの知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか」と誘われても、その預言者や夢占いをする者の言葉に耳を貸してはならない。(中略) その預言者や夢占いをする者は処刑されねばならない。(申命記)
- あなたは、あなたの神、主の祭壇を築いて、その側にアシェラ像をはじめ、いかなる木の柱も据えてはならない。また、あなたの神、主が憎まれる石柱を立ててはならない。(申命記)
- あなたが、あなたの神、主の与えられる土地に入ったならば、その国々のいとうべき習慣を見習ってはならない。あなたの間に、自分の息子、娘に火の中を通らせる者、占い師、卜者、易者、呪術師、呪文を唱える者、口寄せ、霊媒、死者に伺いを立てる者などがいてはならない。(申命記)
- イスラエルの女子は 1 人も神殿娼婦になってはならない。また、イスラエル

の男子は 1 人も神殿男娼にはならない。いかなる誓願のためであっても、遊女の儲けや犬の稼ぎをあなたの神、主の宮に携えてはならない。いずれもあなたの神、主のいとわれるものだからである。(申命記)

- ・職人の手の業にすぎぬ彫像や鋳像は主のいとわれるものであり、これを作り、ひそかに安置する者は呪われる。(申命記)
- ・彼らはバアルのために聖なる高台を築き、息子たちを火で焼き、焼き尽くす献げ物としてバアルに捧げた。(エレミヤ書)

このような聖書の記述を見ると、実際に人身供儀や姦淫・性的退廃が行われていたからこそ、主は注意を喚起し、掟に逆らえば厳しく罰すると言っているのである。特に 7 つの民、ヘト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人に対しては、“必ず滅ぼし尽くし、憐れんではない”と厳しく糾弾されている。彼らの地は、まさにマルドゥクが全アヌンナキに君臨する「神」であると吹聴していた場所である。彼らはアシェラ像などの偶像を拝み、人間の生贄を捧げ、姦淫を行っていた。アシェラはバアルの母とされており、モレクはバアルの別名であると言われているが、結局はマルドゥクによる改竄に過ぎないので、アシェラ＝モレク＝その他様々な偶像崇拜の神々＝バアル＝マルドゥクとなる。そして、彼らから見た異教徒に対して偶像崇拜を勧めたのは預言者や夢占いをする者、卜者、易者、呪術師、呪文を唱える者、口寄せ、霊媒、死者に伺いを立てる者などであり、これはマルドゥクこそが全アヌンナキに君臨する「神」であると吹聴していた彼の息子ナブが原型である。

つまり、マルドゥクによって改竄された神話・伝承によって人類の誤解が生じ、実際に人身供儀や姦淫・性的退廃が行われるようになったと言える。その姦淫・性的退廃の根源は<神々の真相 3>で述べたようにイナンナであり、マルドゥクと並んでサタン、ルシファーの根源である。なお、アシェラ＝アシュラ＝アシラであり、これはイナンナが原型であることは後述する。

4：サタン、ルシファーの意味とイエスの象徴

(1) サタン、ルシファーの意味

サタンは墮天使ルシファーと同一視されることが多く、元々は天から降りてきた者ネフィリム＝アヌンナキの意味である。ネフィリムは実際に大きさが人類よりも大きかったのかもしれないが、聖書では誤って“巨人”とされている。この場合のネフィリムとは、「神々」が人間の娘と交わって生まれた者たちであり、聖書では偶像崇拜により滅びたとされる。

彼らは宇宙服を着た姿、あるいは鳥人間のような姿で描かれており、そのため「神の子」である天使には羽があるように誤解された。また、サタンにも羽があり、嘴があるような姿で描かれることが多い。鳥人間の顔は鷲の姿であるが、鷲は毒をもつサソリとしても象徴される。その理由は、<聖書について>で述べた。

“鷲は、人間を表す象徴である。サソリは鷲の逸脱を表しており、鷲の、深淵への墜落である。墜落が起こるには、何かが高みに存在していなければならない。だから、深淵への墜落とは、高みにある領域からの墜落である。ルシファーは天使で高次の存在であったが、神に反逆して地に落ちた。ルシファーは翼をもがれた墮天使である。つまり、サソリとは鷲が萎縮した姿であり、鷲が落とす影である。”

つまり、鷲が地に落ちた姿がサソリであり、サソリ＝毒のあるもの＝サタンとなったのである。これは単なる占星術の言葉ではなく、アヌンナキの闘争や改竄された神話・伝承の偶像崇拜が原因だったのである。

聖書上で最初にサタンと見なされた（陥れられた）のは、「知恵の樹」に絡まる蛇、エンキである。しかし、エンキは人類が繁殖できるようにし、文明を築かせた。対して、地球の監督者として君臨していたエンリルは、人類が繁殖できるようになったことを快く思わず、大洪水をきっかけに人類を滅ぼそうとした。つまり、エンリルの方がサタン的であると言えるが、サタンではない。エンリルの神話は地母神と交わったように伝えられ、また、洪水直前に人類が人間の生贄を捧げて祈った最初の「神」とされてしまったから、典型的な偶像崇拜の象徴となり、人身供犠と性的退廃がサタンに必要なものと解釈された。それが後に、邪神バアルとなったのである。

では、サタン、ルシファーの実態とは？それは、＜神々の真相 1＞で見た通りである。

- ・マルドゥクが地球人女性サルパニトと結婚したことが原因で、200人のイギギが反乱した。ラームから全イギギがやって来たわけではないが、ラームの指導者マルドゥクはエンキやエンリルに反論してまで、ニビルの権利をすべて捨ててまで（掟に反してまで）、地球人女性を正式配偶者とした。これは、イギギの反逆として象徴される。つまり、マルドゥクにより全イギギ 300人が地球上のアヌンナキ 600人に対して反逆したと象徴される。これこそが、天使の1/3を味方につけたサタンが天界で反逆したことの原型である。
- ・エジプト神話に於いて、ニンギシュジッタは魔術・妖術の原型とされてしまった。これも、ニンギシュジッタを陥れようとするマルドゥクの策である。そして、ニンギシュジッタはグノーシス主義のヘルメス思想に於いてトート・ヘルメス・トリスメギストスとされてエノクと同一視され、あらゆる秘教の大元とされてしまった。エノク魔術は西洋黒魔術の根源である。
- ・イナンナはその美貌でエンキに取り入って騙し、エンキから“メ”を盗み出すことに成功した。つまり、天界の「神」に取って代わることができると思われた墮天使ルシファーの原型である。

- ・イナンナはウヌグ・キにギグヌ、“夜の愉しみの家”を設置し、若い英雄の結婚式の夜に誘い出し、彼女と寝ることにより、長生きと至福の未来を約束した。（“聖なる結婚”の儀式。）彼らは朝になると、彼女のベッドで死んでいた。これが、後のあらゆる宗教に於ける性的退廃の原型となるものである。
- ・マルドゥクは、“死と復活”の問題に、熟考すべき点が多いことに気がついた。そして、“神の神性”という概念は彼の興味を大いに惹き、自分自身が偉大なる「神」になると宣言した。これは、天界の「神」に取って代わることができると錯覚した墮天使ルシファーの、もう1つの原型である。

このように、サタン、ルシファーの原型はイナンナとマルドゥクであり、イナンナは性的退廃の、マルドゥクは偶像崇拜の原型である。

さて、聖書に於ける“墮天使”は、光の天使ルシフェルが知恵を知ることにより神になれると錯覚し、天から墮ちて墮天使ルシファーとなり、“明けの明星”＝金星として象徴されている。この前半の部分は、前述のような原型がある。しかし聖書では、墮天使ルシファーは“明けの明星”＝金星として象徴されるが、イエスも“輝く明けの明星”＝金星として象徴されている。イエスが光で“明けの明星”ならば、ルシファーは闇で“宵の明星”でなければならない。これは一体、何を意味するのか。イエスとルシファーは同一だということなのか。

(2) イエスの象徴

<神々の真相2>で述べたように、金星はイナンナの象徴である。また、<神々の真相3>で述べたように、シヴァの原型はイナンナであり、シヴァの暗黒の化身バイラヴァは牛頭天王であり、牛頭天王と言われる日本の神はスサノオである。スサノオが高天原で暴れたことが原因で、天照大神が岩戸に籠られたが、天照大神とスサノオは双子である。（月読命はほとんど登場しないので架空とみなす。）これはシヴァの原型であるイナンナがヴィシュヌの原型である太陽神ウツと双子だったことに対応し、スサノオが高天原で暴れたことは、イナンナが「神々」の闘争を引き起こしたことが原型となっている。

天照大神はスサノオの姉であり、イザナギの左目から天照大神が、右目から月読命が、鼻からスサノオが生まれた。月読命はほとんど登場せず、月は日本神話を創作した秦氏の象徴あるいは知恵の根源であるエンキの象徴だから、右目か左目かということであれば、スサノオを右目と見なしても良い。カップラーでは右が重要だから、本来なら天照大神が右目でなければならないが、逆である。ならば「合わせ鏡」である。すると、右目が天照大神で男、左目がスサノオで女となり、両者は双子である。これは、ウツとイナンナの関係と同じであり、ウツとイナンナの関係が天照大神とスサノオの話しの原型であることが解る。つまり、イナンナと象徴的に同一と見なせる存在として双子の太陽神ウツがおり、イナンナがスサノオ、ウツが天照大神＝イエスに対応している！（対応しているのであって、必ずしもイエスの真相が太陽神ウツとは断言できないが、イエスの真相を解く重要な鍵である。）

*天照大神とスサノオ、ウツとイナンナの兄弟関係について

ウツとイナンナの関係は「合わせ鏡」によって、日本神話では女神イナンナが男神スサノオ、男神ウツが女神天照大神へと変化している。問題は、兄妹（姉弟）の順序である。

シッチン氏は著書「人類を創成した宇宙人」で、イナンナが初子だったとしている。そうすると、姉（イナンナ）→弟（スサノオ）、弟（ウツ）→姉（天照大神）の「合わせ鏡」となり、性を鏡像反転させるのと同時に出生順も反転させており、2回鏡像反転していることになる。しかし、最新著書の「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」では、ウツが兄となっており、これだと妹（イナンナ）→弟（スサノオ）、兄（ウツ）→姉（天照大神）となって性の鏡像反転だけとなり、鏡像反転は1回だけである。

「合わせ鏡」による鏡像反転は方向性がその都度異なるが、今までの例ではいずれも1回だけの反転であり、2回という例は無い。だから、ウツは兄であると解釈したいが、この場合に限り、2回反転という特例なのかもしれない。

いずれにしろ、この件については（不可能であるが）原文を当たるしかない。兄妹（姉弟）の場合、どちらが出生順として早いのか。英語で‘brother’と言った場合、兄にも弟にも解釈できるが、‘elder’を付ければ兄としか解釈できない。シュメール語でも、そのような区別は可能なのだろうか。（手持ちの文法書を見た限り、そのような区別方法は発見できなかった。）あるいは、シッチン氏は英語の文書を書いているが、訳者が単純に“兄”と思い込んで訳しただけなのかもしれない。

閑話休題。イナンナはその美貌でアヌの愛人となったから、元はアヌの象徴である八角星を彼女の象徴と見なすことが可能である。この八角星はニビルであるが、金星の象徴としても用いられた。イナンナが金星＝“明けの明星”として象徴されるのなら、象徴的に同一と見なせるウツも“明けの明星”として象徴することが可能なので、象徴的にはイナンナ＝金星＝ウツ＝太陽神＝イエスとなり、イエスも金星＝“明けの明星”として象徴される！そして、イナンナは真のサタンではなく、聡明で美しい女神だから、“宵の明星”ではなく“明けの明星”となる。何よりも、杭に吊されて“死んだ”イナンナがエンキの密使により“復活した”話が、十字架に掛けられて“死に”、その後“復活した”イエスの原型になっているので、イナンナは象徴的にイエスにも成り得る！それは、イエスが誕生した時に、天空に輝いたベツレヘムの星が八角星として象徴されることから言える。更に、イナンナがアヌの愛人となったことは、アヌの象徴＝十字型＝十字架にも重ねられる！

また、イナンナは与えられた領地ウルクの地位を高めようと企て、エンキを騙して“メ”＝神の公式＝知恵の秘密＝文明の基礎となる知識を手にした。しかし、後にマルドゥクが台頭すると、ウルクを追われた。つまり、光の天使ルシフェルが“知恵”を知ることにより神になれると錯覚し、天から墮ちて墮天使ルシファーとなり、“明けの明星”＝金星として象徴されるのは、金星で象徴されるイナンナのこの話が原型である。そして、スサノオが暴れ者だったことは、イナンナが「神々」を色仕掛けでたぶらかし、後にマルドゥクとの対立に

よって核戦争までに発展したことが原型である。

このように、日本神話とシュメールの真相から、イエス＝天照大神には象徴として太陽神ウツが重ねられる。＜日本の真相＞では天照大神＝猿田彦で、猿田彦の妻は天宇受売命であった。“ウズメ”に注目すれば、ウズ＝イエス、メ＝女で、猿田彦は天宇受売命と結婚後、宇豆彦（ウズヒコ）とも呼ばれるようになり、宇豆＝ウズ＝イエスだから、天宇受売命はイエスの妻となる。そして、天宇受売命のモデルはマグダラのマリアだから、イエスとマグダラのマリアは結婚していたことになる。

しかし、これもシュメールの真相が原型である。王位継承順位数に着目すると、ウツが 20 であり、イナンナがそれに継ぐ 15 である。アヌナキの夫婦関係に於ける王位継承順位数は、例えばアヌが 60 で正妻のアツが 55、エンリルが 50 で正妻のニンリルが 45、エンキが 40 で正妻のニンキが 35 というように、正妻の王位継承順位数は夫よりも 5 小さい。そうすると、ウツとイナンナの王位継承順位数の関係は、夫と正妻の関係そのものである。つまり、ウツとイナンナは象徴的に夫婦と見なせる。だから、天宇受売命＝猿田彦の妻は、象徴的に猿田彦＝天照大神＝イエス＝ウツに対するイナンナであると言える。天宇受売命は神楽の祖であり、神楽を舞うのは神に仕える女性、巫女であるが、イナンナは大神アヌの前で歌い踊ったので、神楽の祖と見なすことができる。また、巫女は男神と一体となる女性であるが、イナンナは美貌でアヌ（やエンキ？）と関係し、ドゥムジ亡き後は“聖なる結婚”の儀式などを行うようになったので、裸の女神として描かれていることが多く、天宇受売命、そしてマグダラのマリアの原型であると言える。

なお、太陽＝光に関わる日本語で重要なのがウズ＝ウジであるが、ウジというのはウジ・エルというシュメール語があり、これは“神の力”という意味であるから、ウジ＝力である。そして、地上の生命に生きる力を与えているのは太陽であるから、ウツ＝ウジという解釈ができる。大洪水の後に太陽神ウツが現れ、ジウスドラ（ノア）が舟の窓を開けるとウツはその光で舟を照らした、という伝承もあるが、これなども太陽神が人類の光であることの象徴である。

また、ウツの別名は“バブバル＝光り輝く者”であり、光を注ぎ、“天と地球を照らす者”であり、これは名称的に天照大神そのものである。よって、太陽神ウツはイエスの象徴として適切である。

(3) 主との関係

このように、イナンナはイエスと関係が深い、実は旧約のヤハウエ（YHWH）とも関係が深い。例えば、ローマには次のような言い伝えがある。

(<http://www.geocities.co.jp/Bookend/4738/CHRISTMAS.htm> 参照。)

“アドニス之母、太陽神、素晴らしい仲裁の神、彼女は木の中へと変えられていき、その息子は神聖なものとされた。もし母が木だったら、息子はその木に掛けられなければならない。彼は神の枝となって、翌日生まれるかもしれない

からである。”

“木に掛ける”というのは、イナンナがドゥムジの遺体を埋葬するために、姉エレシュキガルが管理している“下の方のアブズ”に行った際、杭に吊されたが、エンキの密使により“死んだ”はずのイナンナが蘇ったことが原型になっている。ここで重要なのはアドニスである。アドニス信仰の起源は西アジアだが、アドニス神話と言えバギリシャ神話の方が一般に知られているので、そのギリシャ神話を見てみる。

(<http://www.h4.dion.ne.jp/~million/myth-other/baal2.htm> 参照。)

“フェニキア王キニユラスの娘ミュラーはとても美しい娘だったが、父親に恋してしまった。禁断の恋をしたミュラーは、顔を隠して父の元に通うも、ついに正体がばれてしまった。激怒して娘を殺そうとする父から逃げ続け、疲れ果てたミュラーは没薬の木（ミルラ）に姿を変えた。そのお腹には赤子がいたので、美の女神アフロディーテは木となったミュラーから赤子アドニスを取り出した。

アフロディーテは赤子のアドニスを箱に入れ、冥府の女神ペルセポネに託した。これは、他の女神から隠すためとも、単に子育てができないからとも言われている。しかし、美しく成長したアドニスにペルセポネは心奪われ、アフロディーテが彼を返すよう求めても、それに応じなかった。アフロディーテはゼウスの下で裁判を起こし、結局、アドニスは1年の3分の1をアフロディーテと、他の3分の1をペルセポネと過ごし、残りの3分の1は自分の好きなように過ごすことと決定された。結局、アドニスは自分の自由に使える時間もアフロディーテと過ごすようになった。

アドニスは狩が好きな青年で、ある日狩をしていると、獐猛な猪の牙にかかって死んでしまった。アフロディーテはアドニスの死をひどく悲しみ、彼の血からアネモネの花を咲かせた。そして、自らの涙は薔薇の花になった。”

<参照ページの著者の説>

アドニスという名の由来は、ヘブライ語の“アドーナイ”、フェニキア語の“アドーン”という“主”を表す言葉が固有名詞になったものであり、ヘブライ語、フェニキア語はいずれも西セム語である。バアルと同じで、元々は神の名を直接呼ばず、“主”と呼ぶための名詞だった。

アドニスに繋がる信仰があったのは、レバノンの谷、イブラヒム川、その上流にあるイシュタル神殿あたりではないかと言われている。この周辺で行われたのがビブロスのアドニア祭（フェニキア、レバノンの春祭り）で、この祭りとギリシャで行われたアドニア祭は、共に青年神の“復活”を喜び、その死を悼むという性格に於いて一致している。

アフロディーテのアドーン（我がいとしい人よ）と呼ぶ声が、アドニスという青年の名になった、という説がある。アドーンやアドーナイが主への呼びかけであったとして、それが愛人と呼ぶ女神の声で、その大元が、イシュタル（イナンナ）がタンムズ（ドゥムジ）を呼ぶ声、アナトがバアルを呼ぶ声だと言わ

れている。それが“愛しい人の死を悼む”という共通性で、悼まれる青年の名前としてアドニスという固有名詞になったのだろうか。

この著者は、なかなか鋭い視点で見ている。アフロディーテとは、ギリシャ神話に於けるイナンナの別名である。（ローマではヴィーナスである。）アドニスは木に姿を変えたミュラーから生まれたから、“もし母が木だったら、息子はその木に掛けられなければならない。彼は神の枝となって、翌日生まれるかもしれない”となるのである。

アドニスの語源はヘブライ語の“主”を意味する“アドーナイ”で、更にその元は、イナンナ＝イシュタル＝アフロディーテが愛するドゥムジを呼ぶ声だったというのは、極めて納得できることである。（アナトがバアルを呼ぶ声、というのは、マルドゥクによる神話改竄が元となった誤解である。）＜神々の真相3＞で述べたように、ドゥムジの命日は1日中喪に服す習わしとなり、イナンナの悲しみは、約2000年後のイスラエルでも、女たちがタンムズ（ドゥムジ）のためにすすり泣いているのを、預言者エゼキエルが見て驚いたぐらいである。

そして、フェニキアとギリシャで行われたアドニア祭が、青年神の死を悼み、その“復活”を喜ぶというのは、まさしくイナンナがドゥムジに抱いていた気持ちそのものであり、ドゥムジが“復活”する幻想をイナンナは抱いていた。また、＜神々の真相1＞で述べたように、ドゥムジの遺体には赤い経帷子が着せられたが、イエスは赤い外套を着せられ、茨の冠を被せられ、葦の鞭で打たれた。ドゥムジの遺体は“眠りから覚める日”を待つために洞窟の横穴に葬られたが、イエスは処刑後に洞窟の横穴に葬られ、3日後に復活した。このように、イナンナとドゥムジの物語には、“復活”が重要なイエスの象徴が満載である。

つまり、アドニスはドゥムジのことであり、ヘブライ語の“主”を意味する“アドーナイ”は、イナンナがドゥムジを呼ぶ声だったと言える。

更に、冥府の女神ペルセポネとはイナンナの姉エレシュキガルのことであり、イナンナがドゥムジの遺体を返すよう要求しても、なかなか応じなかったことが、“アドニスに心を奪われたペルセポネ”の話の原型となっている。

アドニスは獐猛な猪の牙にかかって死んでしまったが、猪といえば、＜神々の真相3＞で見たように、イエスの予型となっているヴィシュヌの化身にヴァラーハという猪がいた。

・ヴァラーハ

大地は水中に沈んだままであった。マヌは大地を水面より上に持ち上げてくれるよう、ブラフマーに頼んだ。頼まれたブラフマーも良い知恵が浮かばなかったので、ヴィシュヌに祈った。すると、ヴィシュヌの鼻の穴から親指大の猪が飛び出し、瞬く間に巨大な姿となった。それを見て神々が驚いていると、ヴァラーハは大声で吼え、水中に飛び込み、その牙で大地を水の上に持ち上げた。

これは、大洪水後のアフリカで水中から島を引き上げたり、谷を水中から引き上げたエンキの話が原型であった。この猪ヴァラーハは“良い猪”であるが、

エンキが“良い蛇”であったのに対してマルドゥクが“邪悪な蛇”であったように、ここでの“獰猛な猪”とは、エンキではなくマルドゥクを象徴している。つまり、“アドニス獰猛な猪の牙にかかって死んでしまった”ことは、ドゥムジがマルドゥクの奸計により死んでしまったことが原型である。

“ミルラ”はミイラの語源でもあり、ミイラには多量の没薬が腐敗防止のために使われた。おそらく、ドゥムジの遺体も暑いアフリカでの腐敗を防止するため、多量の没薬に覆われたのであろう。だから、没薬の木からアドニスを取り出された、となったのであろう。

このように、旧約の“主”を意味する“アドーナイ”は愛するドゥムジをイナンナが呼ぶ言葉であり、新約のイエスはマルドゥクの奸計によって死んだドゥムジが原型であり、旧約の“主＝ヤハウエ”と新約のイエスが象徴的に同一となる！

シュメールの真相が分かるまでは、旧約のヤハウエと新約のイエスが共に“在りて在る者”と言われたこと、秦氏に抵抗する物部氏の前にイエスが降臨し、“在りて在る者”と言われたことにより、物部氏はヤハウエ＝イエスであると認識するに至り、原始キリスト教に改宗したことから、カッパーラ的に両者が同一（イエスの見えない姿がヤハウエ、実態を伴ったのがイエス）、と見なしていた。しかし、実際にはヤハウエはエンキ、エンリルなど、シュメールの「神々」が1つにまとめられたものなので、“真相”と矛盾していることが判明したが、ヤハウエ＝イエスとなる原型がここに見つかったのである。

また、“その息子（アドニス＝ドゥムジ）は神聖なものとされた”のは、イナンナ（アフロディーテ）から見た、王位継承の主張である。実は、クレタ（ミノア）文明などはイナンナが築いた。それが受け継がれてギリシャ文明となり、ギリシャ神話が創られたのである。だから、ギリシャ神話に、このような真相を解くヒントが隠されているのである。（木に掛けるこの話は、更に北欧のオーディーン神話などにも受け継がれている。）

では、その王位継承について見てみる。イナンナはドゥムジの王妃となり、国を正しく導こうとしたが、これはエジプトを管轄していたドゥムジがマルドゥクを無視して、イナンナをエジプトの女王にする約束をしたためである。もし、ドゥムジが死ななかつたら、イナンナの王位継承数字が15だから、ドゥムジにはそれよりも5大きい20という数字が与えられたはずである。しかし、実際に20の数字が与えられたのはウツである。つまり、王位継承数字的にドゥムジとウツは同一と見なすことができ、両者の象徴を重ね合わせることができる！だから、“復活”には直接関係の無い太陽神ウツに、“復活”を期待され、イエスの原型となっているドゥムジの話を重ねることができる。そして、(2)でも述べたように、ウツはイナンナと双子だから象徴的に同一と見なせ、“杭に吊されて蘇った”話を、人類の贖罪を背負って十字架に掛けられ、人類の光＝太陽となったイエスに重ねることができる。また、ドゥムジはニビルから子羊を降ろしたから、イエスの象徴は“神の子羊”にも成り得る。

この王位継承について、日本神話にもヒントが隠されている。「草薙の剣」である。「岩戸隠れ」事件の後、スサノオは8つの頭と尾を持つ八岐大蛇を退治した際、尾から「天叢雲の剣＝草薙の剣」を見つけ、天照大神に献上した。

八岐大蛇は悪い蛇だから、マルドゥクの象徴である。「八＝8」は救世主の象徴で、スサノオの原型且つイエスの原型の1つでもあるイナンナの象徴である。「草薙の剣」は「アロンの杖」であり、「アロンの杖」は族長の中の族長の印で、王権を象徴する。天照大神は太陽神の象徴としてはウツ、本来のイエスの原型としてはドゥムジ（とイナンナ）である。

つまり、正統継承権はマルドゥクではなくドゥムジにあり、実際のシュメールの王の系統は、象徴的にドゥムジに重ねられるウツの子孫から始まった、ということを示している。太陽神ウツの系統が天孫の系統、ということである。

また、(2)で象徴的にはイナンナ＝金星＝ウツ＝太陽神＝イエスとしたが、王位継承数字的にドゥムジとウツは同一と見なすことができ、両者の象徴を重ね合わせることができるので、イナンナ＝金星＝ウツ＝太陽神＝イエス＝ドゥムジとなる。

そうすると、月読命の意味も解ってくる。イザナギの左目から天照大神が、右目から月読命が、鼻からスサノオが生まれた。(2)では、月読命はほとんど登場せず、月は日本神話を創作した秦氏の象徴あるいは知恵の根源であるエンキの象徴とし、右目か左目かということであれば、スサノオを右目と見なした。そして、「合わせ鏡」からイナンナがスサノオ、ウツが天照大神に対応しているとした。

しかし、上記のカッパーラから、ドゥムジも象徴として重ねられることが判明した。実際に月の周期に魅了され、その動きを調査した＝読んだのはエンキだから、エンキは三日月として象徴されている。ならば、エンキが愛した息子のドゥムジにも同じ象徴を重ねることができる。他に三日月が象徴として重ねられる「神々」は、マルドゥクとナンナルである。マルドゥクはエンキと共に月に行ったが、マルドゥクは太陽神として振る舞った。イナンナとウツの父であるナンナルも大洪水の際に月に行ったので、三日月として象徴される。しかし、イザナギの3人の子の内の1人という扱いよりも、イナンナ、ウツとの親子関係からすれば、ナンナルはむしろイザナギに相当すべきだろう。そうすると、月読命にはドゥムジが相当すると見なすのが適切である。

王位継承数字的には、イナンナの15を挟んで（生きていれば）ドゥムジ、ウツ共に20であり、イナンナを中心として2人が象徴的に同一である。つまり、イナンナをスサノオとして中心の鼻、ドゥムジを月読命として右目、ウツを天照大神として左目の対称の位置にすることにより、ドゥムジとウツが象徴的に同一であることを暗示している。（一方が目でもう一方が口、などという場合、対称の位置ではないから、象徴的に同一とは見なせない。）

ドゥムジは象徴としてのイエスの原型であるが、死んでしまったので、カッパーラ的に重要な、人類に直接関わる「神」として重要な、向かって右に配置することはできない。そのため、人類の光たる太陽神として象徴されるウツを「合わせ鏡」として右目に配置したのである。（実際、ウツは人類に法典を授け、

後の聖地エルサレムの管理者でもあった。) また、イザナギが正面を向けば、左目は向かって右となる。この時、三柱の「神々」も正面を向くとしたら、中心のスサノオ=イナナにとって重要な月読命=ドゥムジはイナナの右手に配置することになり、カッパーラ的にも正しい。

以上のことから、月読命はドゥムジの象徴と言える。

さて、没薬と言え、イエス誕生時、東方の三博士が祝福のために持ってきた没薬、乳香、黄金の中の 1 つである。没薬がアドニスに象徴されるドゥムジを表すなら、黄金はニビルの象徴であり、大神アヌの象徴でもある。そうすると、これら 3 つの祝福物は、実はシュメールの三柱の「神々」を表していることになるが、では、残りの乳香は誰に相当するのか。まずは、同じようにギリシャ神話を見てみる。

(<http://www.ne.jp/asahi/info/adjust/girisia-frame.htm> 参照。)

“バビロンの王オルカモスとエウリュノメの間に、レウコトエという娘が産まれた。ヘリオスは美しいその娘に出会って一目で虜となった。ある夜、ヘリオスはレウコトエの母親に化けて、彼女の部屋に忍び込んだ。レウコトエは驚いたが、優しくて美しいヘリオスの愛を受け入れた。

これを知ったヘリオスの恋人クリュティエは、激しい嫉妬を抱いてあること無いことを言いふらし、オルカモスにまで告げ口した。厳格な父王は怒り狂い、ヘリオスに唆されたのだと、レウコトエを責めた。ついには、地面に深い穴を掘って、彼女を生き埋めにしたのである。

ヘリオスは急いで駆けつけ、光で土を吹き飛ばし穴をあけたが、レウコトエは既に息絶えていた。悲しみに沈むヘリオスが穴の中の彼女に神酒（ネクトル）を注ぐと、見る見るうちに亡骸は消え失せ、そこから 1 本の木が芽を出した。それはやがて大木となり、芳しい香を放つ香木、乳香になった。”

ヘリオスはギリシャの太陽神である。太陽神としての象徴はウツであるが、カッパーラ的にウツにはドゥムジが重ねられるので、ヘリオスをドゥムジと見なすことができる。そうすると、ヘリオスはレウコトエと一緒にになったから、レウコトエはイナナの象徴である。ここではヘリオスではなく、レウコトエがクリュティエの策略により死んだから、ドゥムジとイナナの関係が逆の立場、つまり「合わせ鏡」になっている。そうすると、策略したクリュティエ（女）がマルドゥク（男）に、実際に手を下したオルカモス（男）は実際にドゥムジが関係を持ち、逃げ惑って死ぬ原因となったゲシュティナナ（女）に相当するので、これは性が「合わせ鏡」になっている。

以上のことから、乳香はイナナを象徴するが、この神話だけでは象徴の重ね合わせと「合わせ鏡」の関係がややこしい。そこで、別の側面から見る。それは、不死鳥伝説のフェニックスである。

①<http://www58.tok2.com/home/hermitage/monster/phoenix.htm> 参照。

フェニックスの食料は一風変わっており、乳香の木やバルサムの樹の樹液、

太陽の熱、テティスの風、清らかな水蒸気とされている。生息地はアラビアで、エジプトにその遺骸を横たえたとされている。フェニックスの寿命は 500~600 年とされているが、死んでもまた復活するところから、不死鳥と呼ばれる。

この復活方法も様々な説があり、フェニックスが死ぬ前に既に子供が産まれているとする説もある。これによると、親鳥が死ぬと幼鳥は没薬でその遺骸を包み、アラビアからエジプトへ運び、その周期は 500 年とされている。

BC1 世紀になると、親鳥の骸から虫が生まれ、それが成長して新たなフェニックスとなる説が誕生した。また、最も有名と思われる復活方法では、500 年生きたフェニックスは香料を積み上げ薪の山を作り、その上に横たわり自ら火をつける。やがて、分解した身体の液状の部分が凝固すると、そこから再びフェニックスが誕生するというのである。(フェニックスが燃えた後の灰には、命を蘇らせる効果があるという。)

フェニックスのモデルは、青鷲ベンヌだとされている。ベンヌは、ヘリオポリスで聖なる鳥とされており、太陽神ラーの象徴である。毎日生まれては(日の出)死ぬ(日没)太陽と同様、死後の復活を表す鳥である。

②Wikipedia 参照。

フェニックスは、永遠の時を生きるという伝説上の鳥である。見た目または伝承から火の鳥とも言われる。世界各地の伝承では、その涙は癒しをもたらし、血を口にすると不老不死の命を授かると言われている。

元はエジプト神話の霊鳥ベンヌであるとされる。しかし数百年に一度、自ら香木を積み重ねて火をつけた中に飛び込んで焼死し、その灰の中から再び幼鳥となって現れるという伝説は、ギリシャ・ローマの著述家によってしか伝えられていない。古代フェニキアの護国の鳥“フェニキアクス”が発祥とも言われている。

③<http://www.city.kure.hiroshima.jp/~miyc/t10b02.htm> 参照。

フェニックスとは、元々ヤシ科ナツメヤシ亜科ナツメヤシ属の総称である。一般的なのは古代エジプトの想像上の鳥で、“不死鳥”と訳される。フェニックスはアラビアまたはフェニキアに住み、タキトゥスによれば、500 年毎に太陽の都ヘリエポリスを訪れ、生命の終わりが近づくと香木を山と重ねて火をつけ、自らを焼き、妙なる歌声とともに死に至ると言われている。そしてその灰の中から蘇るのが次代のフェニックスであり、同時に 2 羽のフェニックスはこの世に存在しない。

英語のフェニックスに相当するギリシャ語のフォイーニックスは、フェニキア、紫、ナツメヤシの 3 つの意味を持つ。そこで、生地はフェニキアとなり、王者の色として紫の色を身に纏うこととなり、勝者のシンボルとしてのナツメヤシと同一視される。ナツメヤシの実がフェニキア人の使った赤紫色の染料を用いた色に似ていたことから、ナツメヤシも意味するようになったという。また、赤紫色の染料で染めた衣服は最も高貴な身分を象徴するが、この染料はフェニキア特産の貝紫から赤紫の色素を抽出したものであり、フェニキア人はこの貴重な色素で財を築いた。

④<http://www.fmkagawa.co.jp/yomu/seikimatu/seikimatu100.htm> 参照。

生命の木と呼ばれ、砂漠の中のオアシスのような、厳しい環境の中でも成長し、いつも緑を絶やさないナツメヤシは、その元々の名“フェニックス”が示すように、不死の象徴、勝利の象徴と見られ、ギリシャやローマでは、競技の勝利者の冠などに使われ、ローマの軍隊が行進するときは、列の先頭にこれを掲げたと言われる。

キリストが布教を終え、エルサレムに入城した時、民衆は木の枝を道に敷いて歓迎したが、これはナツメヤシの葉だった。今でもキリスト教徒たちは、復活祭直前の日曜日をパームサンデー（枝の主日）と呼び、ナツメヤシの葉を手にして礼拝し、次の水曜日には復活の象徴とも言われるその葉を燃やした灰を額にすり付け、肉体は灰に帰しても、やがて復活する日を信じる儀式（灰の水曜日）をし、次の日曜日の復活祭を迎える。

現在、一般的に知られているフェニックスは不死鳥であり、それが乳香を食べていたのなら、乳香はフェニックスが死んで“復活”する象徴に相応しい。

フェニックスのモデルが青鷲ベンヌで、太陽神ラーの象徴だと言われているとしても、これら一連の話と、マルドゥクが“復活”の概念に興味を持って神話をいろいろでっち上げたことから、マルドゥクの“ベンベン=ベンヌ”が原型ではなく、彼が見聞きした話を都合の良いように改竄したのである。

特に③に関連して、「神話・伝承事典」（バーバラ・ウォーカー著、山下主一郎主幹・共訳、東京・大修館）には次のようにある。

“フェニキア人とはアシュタルテに生贄として捧げられた聖王のことである。聖王の靈魂は鳥と見なされ、靈魂=鳥が火葬の炎から再生して天界へ飛翔する。”

アシュタルテとはイシュタル=イナンナの別名であるから、これはイナンナが行った“聖なる結婚”の儀式である。イナンナはウヌグ・キにギグヌ、“夜の愉しみの家”を設置し、若い英雄の結婚式の夜に誘い出し、彼女と寝ることにより、長生きと至福の未来を約束した。（“聖なる結婚”の儀式。）だが、彼らは朝になると、彼女のベッドで死んでいた。これが“生贄”、すなわち人身供犠という概念に曲解され、いつしか「神」には“血”が必要であると誤解されるようになったのである。

しかし、“聖なる結婚”の儀式で死ななかった者が唯一人いた。英雄バンダ（ウツの曾孫）である。それにより、イナンナは不死の力を手にしたと思い込み、自分のことを女神イナンナ、“不死の力”と呼ぶことにした。ここから、“再生”“復活”という概念が現実味を帯びてきたのである。元々、“聖なる結婚”の儀式はドゥムジの“復活”を夢見たイナンナの妄想に過ぎなかったのである。

当時、シュメールの「神々」は空飛ぶ乗り物で移動していたから、翼を持つ存在、あるいは鳥人間として粘土板に記されており、鳥は「神々」の象徴でもある。特に、イナンナは“空の旅”が好きだった。これと、マルドゥクによる神話・伝承の改竄・でっち上げを合わせると、不死鳥フェニックスの真相が見

えてくる。〈神々の真相 1〉での場面を振り返る。

・ベンベンの設置と偶像崇拜の始まり

マルドゥクは自分より年長者たちを祀る聖なる都を築いた。ニビルの王に敬意を表したアンヌ（オン、ヘリオポリス）、その中のプラットホームの上にエンキのための神殿住居を建てた。その頂上は内側が高い塔になっており、尖ったロケットのようにそびえていた。その聖堂に、マルドゥクは自分の“空のはしけ船”の上部を置いた。それはベンベンと呼ばれ、“数え切れない年月の惑星”から彼が旅した時に乗ったものだった。新年の日、王は高僧として祝賀を執り行い、一番奥の“星の部屋”に入り、ベンベンの前に供え物を置くのである。

この第 2 の地域を後押しするため、エンキはあらゆる種類の“メ”をマルドゥクに与え、あらゆる種類の知識を授けた。唯一、“死者を蘇らせること”を除いて。

・「神」になる宣言と天国のでっち上げ

マルドゥクはドゥムジの領地奪還を仄めかすイナンナの夢や幻影に彼は動揺し、その企てに対抗することにした。彼は、“死と復活”の問題に、熟考すべき点が多いことに気がついた。そして、“神の神性”という概念は彼の興味を大いに惹き、何と、自分自身が偉大なる「神」になると宣言した！

血統的にほとんど地球人であるギルガメッシュに対して許可されたことに、マルドゥクは腹を立てた。だが、王や民の忠誠を維持するためには、「神」の国へ行って長い寿命が授けられる、「神」の領域に近づくことができるという考えは、賢い方法であると見なした。半神半人が不死への出入り口を教えてもらえるのなら、自分の領地の王たちにも、これを適用しようとマルドゥクは決めた。自分の地域の王をネテル（ネフィリム）の子孫ということにして、“来世”でニビルに旅させよう、と決めた。

彼は“ティルムンの土地”がある、東を向いた墓を建てる方法を王たちに教えた。そして、神官に長い本を与え、それには“来世の旅”について詳しく記されていた。“ドゥアト（ティルムンの土地のエジプト名）”への辿り着き方、そこから“天国への階段”で不滅の惑星への旅の仕方、“生命の植物”を食べること、“若さの水”を飽きるまで飲むことについて記されていた。神官たちは、地球への「神々」の到来について、マルドゥクから教えられた。（中略）マルドゥクはエンキの言うことすら聞かなかった。”

マルドゥクはエンキから知恵を授けられたが、“死者を蘇らせること”だけは伝授されなかった。この場合、実際に死者が蘇るわけではなく、瀕死の状態の者を回復させる医療、ということである。それにも関わらず、マルドゥクは“死と復活”“神の神性”という概念に興味を惹き、自分自身が偉大なる「神」になると宣言したから、彼が言う“死と復活”の概念は誤解、もしくはでっち上げである。彼流の“来世の旅”は、“天国への階段＝ベンベン＝マルドゥクの乗っていた宇宙船の先端部⇒宇宙船”で不滅の惑星ニビルへ旅することであり、「神々」のような“鳥”となって“神々の国＝ニビル”へ行って“復活”する

のである。

つまり、フェニックスの語源たる“聖王の靈魂＝鳥が火葬の炎から再生して天界へ飛翔する”ことは、マルドゥクがバビロニアの主神となってから、イナンナの行っていた“聖なる結婚”の儀式を彼流に解釈し直した＝でっち上げた結果なのである。だから、①の“フェニックスはアラビアで生まれ、エジプトで死ぬ”ことや、②の“元はエジプト神話の霊鳥ベンヌである”ことのように、マルドゥクの本래の領地であるエジプトに話が関連しているのである。

よって、フェニックスの大元はエジプトではなく、ナツメヤシと見なすのが適切である。ナツメヤシは④にも記載されているが、実は「生命の樹」の原型である！これは、シッチン氏の「人類を創成した宇宙人」にも記載されており、それによると、鷲の姿をした「神」の使いが「生命の樹」に「生命の水」をやっている姿の粘土板が紹介されている。そして、ナツメヤシはイナンナの好物だった！

また、ドゥムジの遺体には赤い経帷子が着せられ、イエスは赤い外套を着せられたが、それは高貴な身分を表す赤紫の色素を意味し、③にあるように、“復活”を象徴する“フェニックス”という言葉でナツメヤシをも意味している。つまり、ドゥムジの“復活”を願い、ナツメヤシが好きだったイナンナを象徴している。これで、イナンナ－ナツメヤシ－フェニックス－乳香－復活という明確な繋がりが判明した。また、ナツメヤシの赤紫－赤い経帷子、赤い外套－ドゥムジ、イエスという象徴も重ねられている。

④の“キリストがエルサレムに入城した時、民衆はナツメヤシの葉を道に敷いて歓迎した”ことは、イエスに象徴されるドゥムジを、ナツメヤシに象徴されるイナンナが迎えた、ということである。そして、“復活の象徴とも言われるその（ナツメヤシの）葉を燃やした灰を額にすり付け、肉体は灰に帰しても、やがて復活する日を信じる”ことは、フェニックスの不死鳥伝説とドゥムジの“復活”が重ねられている。

ギリシャ文明の大元であるクレタ（ミノア）文明はイナンナが築いたが、イナンナに関わるフェニックス＝不死鳥伝説がギリシャ・ローマの著述家によってしか伝えられていないということは、1つの鍵であろう。そして、聖書はこれらの出来事の後には書かれているから、いろいろな話を統合できるのである。

以上のことから解るように、偶像崇拜の根源はマルドゥクが拝ませていたベンベンである。人身供犠は、イナンナの行っていた“聖なる結婚”の儀式が曲解されていったものである。フェニキアは後にカナンと呼ばれる地域だが、“フェニキア人とはアシュタルテに生贄として捧げられた聖王のこと”であるならば、マルドゥクが主神となって以後、偶像崇拜と人身供犠が重なったこの地域と民族は、主から忌み嫌われ、呪われた意味が良く解る。

なお、イナンナは他にアシュラとも言われ、実は2:の<エンリル>神話で登場したアシュラと同じである。アシュラと言えば、イナンナが治めていたペルシャとインドに登場する。ペルシャではアフラ・マズダーであり、ゾロアスタ

一教の最高神である。(以降、Wikipedia 参照。) その名は“知恵ある神”を意味し、善と悪とを峻別する正義と法の神であり、最高神とされる。起源的には、インド、イラン共通時代の神話に登場する最高神であるヴァルナである。確かに、イナンナはこの地域の最高神である。

ゾロアスター教の神学では、この世界の歴史は、善神アムシャ・スプンタと悪神アンラ・マンユらとの戦いの歴史そのものであるとされる。そして、世界の終末の日に最後の審判を下し、善なるものと悪しきものを再び分離するのがアフラ・マズダーの役目である。これは、エンリルー族とマルドゥク一派の戦いを原型にしていることは、言うまでもない。

ザラストラ (ツァラトウストラ) の宗教改革によって教理的意味付けがなされ、宇宙の理法の体現者にまで高められたのがアフラ・マズダーである。古代のイラン、インドの神話共有時代における始源神であるヴァルナは契約の神ミトラと並ぶ最高神でもある。ミトラあるいはミトラスは太陽神でもあり、契約の神と太陽神ということでイエスの予型であり、仏教ではマイトレーヤ (弥勒菩薩) となった。

対するインドでアシュラ=アスラと言えば、魔族の総称である。本来、リグ・ヴェーダに見られるように、古代インドに於いてアスラは悪役的な要素は無く、デーヴァ神族の王インドラに敵対することもある天空神・司法神ヴァルナの眷属を指していたが、その暗黒的・呪術的な側面が次第に強調されるようになり、時代が下った古代インドではアスラを悪として扱うようになった。

イナンナは亡きドゥムジのことばかりを思って浮ついた気持ちであり、自分遠い領地アラタのことは、ある意味、ほったらかしだった。そのため、王同士がイナンナを招聘するために張り合っており、そのため、(後の) ペルシャとインドは仲が悪く、一方で善神であれば、もう一方では悪神となる構造なのである。

このような不理解がまかり通っていたのは、イナンナはエンキからかなりの“メ”を奪っており、それを快く思わなかったエンキは彼女の領地アラタに対して十分な“メ”を渡さず、文明が十分に花開かなかったためである。

また、アシュラ=アシラであり、ヘブライ語でアシラは異教の女神で、その象徴は柱である。“アシラ”に“h”を付ければ“はしら”となる。ここで言う異教の女神とは主にアッシリアの女神のことであり、つまり、イナンナのことである。

更に、柱に関連する神と言えば、イナンナが主神であるインダス文明の神々の中に、柱から出てきた神がいる。イエスの予型となっているヴィシュヌの化身の1つ、ヌリシンハ (ナラシンハ、人獅子) である。

“兄弟を殺したヴィシュヌに対する復讐に燃える魔神ヒラニヤカシブは、ブラフマーの恩寵により、人間にも獣にも神々にも魔物にも殺されない体となった。しかし、ヒラニヤカシブは熱心なヴィシュヌ信者であった息子のプラフラーダを殺そうとしたが、プラフラーダはヒラニヤカシブにヴィシュヌの偉大さを説

き、広間の柱の中にもヴィシュヌが存在していることを説いた。ヒラニヤカシプは怒って柱を蹴ると、突然、頭が獅子、体が人である人獅子の姿のヴィシュヌが現れ、ヒラニヤカシプを爪で八つ裂きにした。ヴィシュヌは人間にも獣にも神々にも魔物にも殺されないヒラニヤカシプを退治するため、この人獅子の姿をとったのである。”

ヌリシンハは太陽円盤のチャクラを持っているが、その中には六芒星が描かれているものがあり、太陽神を示しているのと同時に、ダビデの家系を暗示している。そして、メルカバーを構成する獅子と人がある。獅子はユダ族の象徴であるから、後にイエスがユダ族から誕生することの予型になっている。

つまり、柱からイエスの予型たるヌリシンハが登場したという象徴は、イエスが柱として象徴されるイナンナと大いに関係があることを暗示している。

閑話休題。このように、イエス誕生時、東方の三博士が祝福のために持ってきた没薬、乳香、黄金はそれぞれドゥムジ、イナンナ、アヌの象徴で、シュメールの三柱の「神々」を象徴していることになる。では、東方の三博士とは何なのか。

東方の三博士はイエスを祝福しに来た。イエスを象徴としてウツあるいはイナンナと見なすと、その誕生を喜んだのは両親とエンリルになる。エンリルは良いとしても、両親（ナンナルとニンガル）は重要な場面にはほとんど登場しないから、“東方の三博士”のような象徴にはなりにくい。そこで、イエスをドゥムジと見なせば、彼を最も祝福したいのはイナンナである。ドゥムジの死はイナンナに大きな悲しみをもたらしたが、実父エンキも大いに嘆き悲しんだので、ドゥムジとの関わりが深い。イエスは地球の主に対応しい存在であることから、地球の主エンキは外せない。他にドゥムジと誠実な関わりが深いのは、兄弟で、共にニビルに行ったニンギシュジツダである。ニンギシュジツダはケツアルコアトルとして海を越えた“東の方”へ行き、“セーアカトル（1の葦の年）に復活する”と宣言してアステカを立ち去ったとも言われており、カッパーラの象徴が満載の“知恵”はエンキかニンギシュジツダのみに可能である。

よって、東方の三博士とは、ドゥムジを祝福するイナンナ、エンキ、ニンギシュジツダの象徴である。

なお、イエスは神殿で金貸しを行う者、神殿娼婦（夫）、人身供犠を行う者を追放した。これらの者は皆、偶像崇拝を認めていた当時の神官の成せる業であり、イエスのこのような態度に神官たちは腹を立て、十字架に掛けるよう仕向けたのである。この話の原型は、偶像崇拝がマルドゥクの象徴であり、マルドゥクの奸計によりドゥムジが死んでしまったことである。つまり、偶像崇拝の邪神が誰なのか、ドゥムジを死に至らしめたのが誰なのか、暗示しているのである。

以上のような話は、日本に聖十字架と三種の神器が無ければ、聖書とイエス

の話は創作である、と断定できてしまうほどの内容である。欧米人がイエスについて理解できない、あるいは誤解してしまうのも、無理はない。

(4)ユダの福音書について

<聖書について>で「ユダの福音書」の概要を紹介し、それに対する解釈を行った。しかし、イエスが十字架に掛けられる必然性が不明なこと、カイン派と呼ばれる一派が極端なまでに旧約の神に逆らって安息日を無視し、豚肉を食べ、姦淫にふけたこと、ソドムとゴモラの人々を正当な理由を持つ反逆者として褒め称えていることなど、多くの疑問と悪魔主義的要素が見られた。そこで、シュメールの真相と今回の偶像崇拜の真相を基に、再考察する。

ユダの福音書では、“反抗する者”という意味の天使ネブロ（別名ヤルダバオート）ともう1人の天使サクラスが諸天に12の天使を生み出し、それぞれが諸天の分け前を受け取った。そして、サクラスが天使らと共にアダムとエバを創りあげた。サクラスらはイエスの名に於いて姦淫し、彼らの子供たちを殺した邪神である。しかし、サクラスらによる支配期間は限られており、黙示録に通じるものであった。

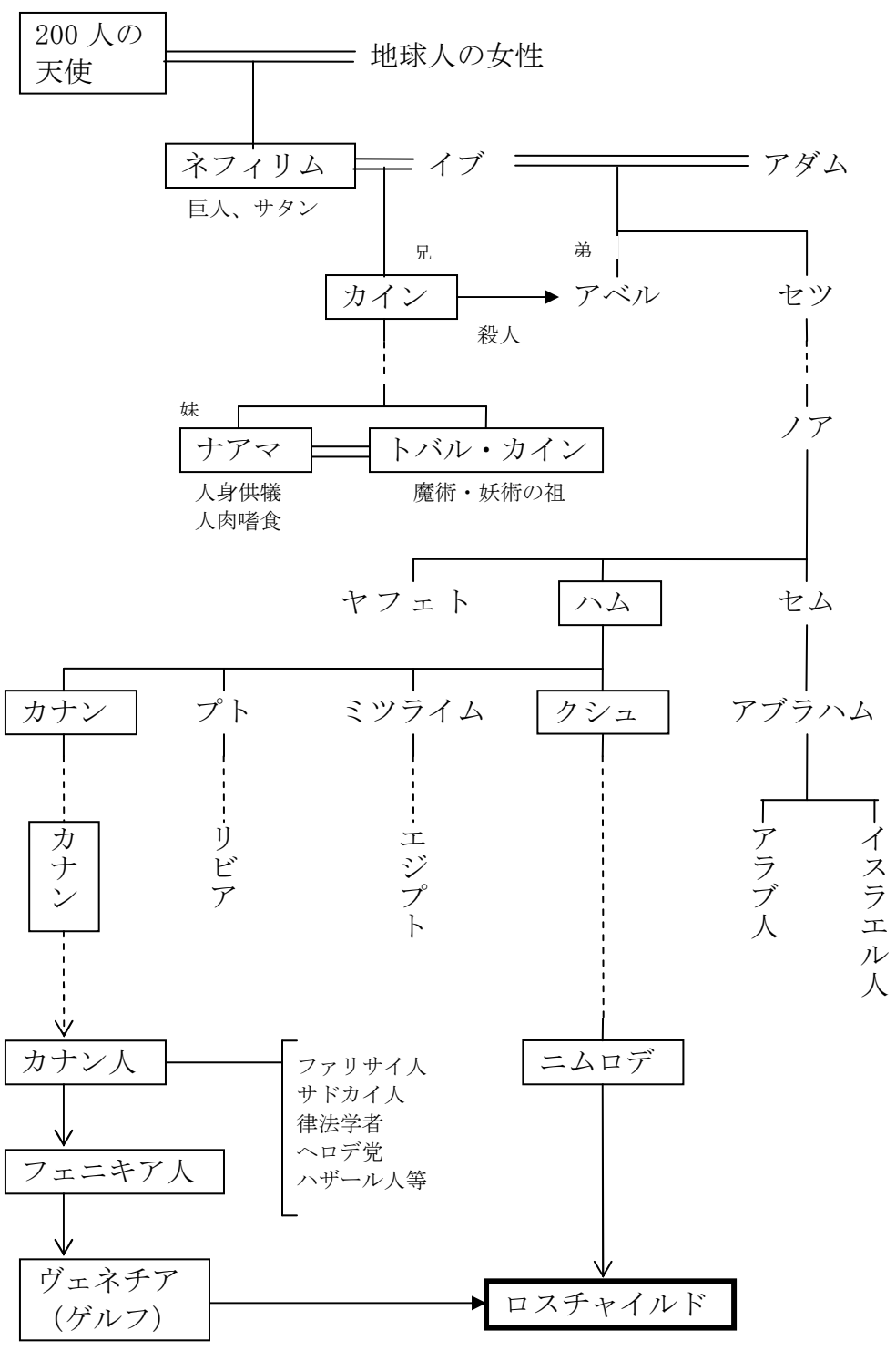
アヌンナキに当てはめると、人類を創造したサクラスはエンキに、もう1人の天使はエンリルに、諸天の天使は他のアヌンナキに相当する。しかし、実態は<神々の真相1>で述べた通りであり、この福音書自体も偶像崇拜が原因となった誤解に基づく書であると言える。つまり、ユダの福音書はマルドゥクによる神話・伝承改竄が原因となった偽書である。

5：ロスチャイルド家

(1)ロスチャイルド家の系図

ロスチャイルド家は世界経済を一手に握る一族であり、実質、世界を裏から支配している。「ロスチャイルドの密謀」（ジョン・コールマン、太田龍共著、成甲書房）という著書の中に、ロスチャイルド家の系図が記載されている。ロスチャイルドはニムロデを祖先とすると自称しており、彼らはニムロデをサタンと見なしているという。しかし、これまで見てきたように、ニムロデはサタンではなく、原型はマルドゥクである。そこで、このロスチャイルド家の系図を示し、マルドゥクによる改竄が如何に現在の世界にまで悪影響を及ぼしているのか検討する。その系図を次のページに示す。

この系図では、200人の天使が墮落して地球人女性と交わることにより誕生したネフィリムがサタンの根源とされている。しかし、<神々の真相1>で示したように、マルドゥクが地球人女性サルパニトと結婚したことが原因で200人のイギギが反乱し、掟に反してまで、地球人女性を正式配偶者とした。これが、原型である。つまり、マルドゥクにより全イギギ300人が地球上のアヌンナキ600人に対して反逆したと象徴され、天使の1/3を味方につけたサタンが天界で反逆したことの原型である。つまり、この系図は<神々の真相2>で述べたエノク書が基になっているのである。



* (エチオピア語) エノク書

「創世記」に登場する族長エノクに帰せられる偽書の 1 つで、現在ではエチオピア語訳のみがその全体を伝えているためにこう呼ばれる。エノク第一書とも言う。エノクが幻の中で神を見て、“200 人の天使”が天から降り、天上、地上、地下の世界を巡って世界の秘密を知らされる内容を記す。エノクが見た秘密の中には、自然界の法則だけでなく、大洪水や最後の審判などの予言も含まれている。しかし、最も重要なのは、人間の娘と交配した“200 人の天使=墮天使”の名称などについての記述で、“200 人の天使”はセムジャザを筆頭に、アラキバ、ラメエル、コカビエルなどが含まれている。こうした墮天使は、後に“エノクのデーモン”と呼ばれるようになり、エチオピア語エノク書はそのようなデーモンについてのハンドブックとして、重要な魔術書の 1 つに数えられている。

(<http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/1237/e.html> 参照。)

*エノク語

イギリスの科学者で魔術師のジョン・ディーが霊媒師エドワード・ケリーを通じて“天使”との交信を行っている際にその存在が明らかにされた言語で、エノク書に本来使用されていた言語とされる。ディーはケリーを通じてエノク語を入手し、“天使”との対話をエノク語で綴った。イギリスの魔術師で、近代魔術結社の源流と言われる“黄金の夜明け”(1888 年創設)の共同創設者の 1 人 S.L. マックレガー(メイザーズ)はこの言語を体系化し、20 世紀最大の黒魔術師アレイスター・クロウリーは“黄金の夜明け”の公用語に採用した。“天使”の言葉であることから、諸霊を操る際に用いると力を発揮すると信じられ、エノク語で諸霊を操る魔術をエノク魔術と呼ぶ。しかし、ある研究によれば、英語に酷似した文法を持つ疑似言語である。

(<http://www016.upp.so-net.ne.jp/o-world/e.html#10> 参照。)

また、ケリーはペテン師として耳を切り落とされたほどの悪党であった。そして、エノク語によって“天使”を信じたディーは突拍子もないケリーの話の信じてしまう。ケリーはディーが名声のある博士だったことから、“天使のお告げ”と称して金銭を巻き上げたり、彼の妻をモノにしてしまった。更に、ディー博士の名声を利用し、各地の貴族から大金を騙し取ったりした。その後、ディー博士は英国に逃れ、村の占い師としてひっそりと余生を過ごした。ケリーはドイツで逮捕され、牢獄の窓から飛び降り自殺した。そして、“黄金の夜明け”は世界を裏から牛耳る三百人委員会のオカルト組織である。

(<http://dolmeke.blog11.fc2.com/blog-entry-311.html> 参照。)

<神々の真相 2>で述べたように、エノク書はマルドゥクによるニンギシュジッタの真相隠しが原因となった、グノーシス主義的なサタン崇拝の根源の書である。ニンギシュジッタはマルドゥクによって魔術の根源とされ、ヘルメス思想ではトート・ヘルメス・トリスメギストスと呼ばれた。トート・ヘルメス・トリスメギストスが叡智を刻んだとされるエメラルド・タブレットは、中世ヨーロッパのオカルト思想の根底となった。

また、この系図はサタン崇拝の根源であるエノク書が基になっており、特にカインの系統が間違っている、と言うよりも、意図的に改竄されている。＜神々の真相1＞で述べた通り、エンキが地球人女性に産ませたアダパとティティの間に生まれたのがカ・イン（カイン）とアバエル（アベル）である。カ・インはニヌルタにより種蒔きと刈り取りを、アバエルはマルドゥクにより牧羊を教えられた。つまり、カ・インの系統はエンリルーニヌルタの、アバエルの系統はエンキマルドゥクの系統と見なすことができる。最初の作物が刈り取られ、最初の羊が成熟した初物の祝いの席で、エンリルは2人の労働を褒め称えたものの、エンキはアバエルの子羊だけを賞賛したから、カ・インは不満を募らせてアバエルを殺害し、南北アメリカ大陸に追放された。真相を知るまで、マルドゥクはカ・インの死刑を望んでいたもので、カ・インの系統＝エンリルーニヌルタの系統をサタンにしてしまったのは、マルドゥクによる改竄と言える。それは、バビロニア神話でエンリルを邪神バアルとして陥れたことと同じである。

また、カ・インの子孫は大洪水を筏で助かり、金属の扱い方を知っていた。カ・インを指導したのはニヌルタであり、アダパの臨終の際、追放されたカ・インを迎えに行き、葬儀の後、追放の地に戻したのもニヌルタである。そのため、カ・インの子孫はニヌルタを自分たちの祖先の守護者として思い出し、“偉大な守護者”と呼んでいた。金属精錬はニヌルタが最初にバド・ティビラでクニンに溶鉱炉と窯について教えたが、ニヌルタが人類に指導したのである。カ・インが追放された地でも、ニヌルタは新しい金属、アナク（錫）を抽出し、大量の銅と混ぜ合わせることで、強力な金属、青銅を考案したりしている。そして、大洪水後の新しい“天の二輪戦車の場所”はニヌルタによってナスカ平原に設置された。マルドゥクはアナに赦されたものの、自分の存在を無視して新しい“天の二輪戦車の場所”が設置されたこと、4つの地域について成された決定について怒り心頭に発した。そのため、マルドゥクはカ・インの系統＝エンリルーニヌルタの系統をサタンに改竄してしまったとも言える。

金属関連で言えば、系図に登場するトバル・カインとは、“青銅や鉄で様々な道具を作る者”という意味であり、魔術・妖術などとは関係無い。これなども、ニンギシュジツダがトート・ヘルメス・トリスメギストスとして魔術の根源とされてしまったことと同じ改竄であり、ニヌルタが仕切っていた金属精錬をトバル・カインという名に関連させ、魔術・妖術の祖として陥れたのである。

だから、トバル・カインが妹ナアマと交わったというのも、カ・インが配偶者としての妹アワンを伴って追放された原型が改竄されたのである。そこに、バアルが妹アナトを妻としたことが重ねられ、いつしかこのような改竄により、人身供犠や人肉嗜食が発生したのである。カ・インの子孫は、後に南北アメリカ大陸の古代文明を築いており、決してサタンの存在ではないのである。

なお、聖書では祭壇の四隅に生贄＝羊などの血を掛けることになっているが、これは“血”が重要なものであり、間違っても人間の生贄＝血そのものを祭壇に捧げてはならないという暗示である。偶像崇拝では、フェニックス伝説にも

登場したように、実際に人間（幼児や処女）の生贄を捧げていたのである。

(2) クリスマス

(<http://www.geocities.co.jp/Bookend/4738/CHRISTMAS.htm> 参照。)

ここで、クリスマスの話は唐突と思えるかもしれない。しかし、クリスマスにもニムロデに関わる偶像崇拝が影響を及ぼしている。イエスは馬小屋で生まれたとされているが、12月にはイスラエルでも寒く、野宿は困難故、10～11月と見なされている。となると、クリスマスは何の日か？一説では、バベルの塔を建て、主の怒りを買ったニムロデの誕生日とされている。ニムロデは母親とも交わった悪魔主義者と言われている。そして、ロスチャイルドは自らをニムロデの子孫としている。ロスチャイルド家の食卓では、1つだけ席を空けておく。それは、彼らにとっての神＝サタン＝ニムロデのためである。ニムロデのシンボルはXであり、ギリシャ語の X'mas はこれに由来するという。

イエスは光だから、本来ならば太陽が復活する冬至が誕生日とされても良いが、わざわざ12月25日とされたのは、この説に依ると、ニムロデを崇拝させるためである。これは、ローマ皇帝テオドシウスが異教徒たちをクリスチャンに仕上げてしまい、異教徒の儀式がそのまま教会に入ってきて、交じり合ったものである。

クリスマスを祝う風習は新約にも記載されていない。クリスマスツリー（もみの木）はローマ、エジプトで古くから見られる偶像崇拝である。もみの木はローマでは“バアル・タマー”、エジプトでは“バアル・ベリス”と呼ばれていた。どちらも偶像崇拝の根源神“バアル”を名称に持つ。

では、この話の真相を考える。“ニムロデは母親とも交わった悪魔主義者”ということは、2：バビロニア神話の“バアルと呼ばれていたエンリルが自分の母で地母神のキと交わった”という話が原型の、創作話であることは明白である。また聖書では、ニムロデは“地上で最初の勇士となり、主の御前に勇敢な狩人”であり、“東の方から移動してきた人々が（ニムロデの王国である）シナルの地に平野を見つけ、そこに住み着き、天まで届く塔のある町を建てた”と記載されているが、伝承ではバベルの塔を建て、神に反逆したのはニムロデとされている。表面的に見れば、バベルの塔建造を企てたマルドゥクの所業がカモフラージュされているが、ヘブライ語で“ニムロデ”は“我々は反逆する”を意味し、誰がバベルの塔の首謀者なのか暗示している。また、バアル・タマー、バアル・ベリスという言葉がバアル＝マルドゥクを象徴している。つまり、マルドゥクによる改竄が原因となり、このような誤解が生じたのである。しかし、悪魔主義者たちはニムロデを神＝サタンと見なして崇拝し、世界を牛耳ろうとしているので大問題である。

以下、クリスマスに関係する事項である。

・ツリーに飾られる星、月

万物を創成した創造主ではなく、創造主によって創られた天体を崇拝してい

る。天体を拝んでも、救われないことは、イザヤ書に記載されている。

“あなたに助言する者が多すぎて、あなたは疲れている。さあ、天を観測する者、星を見る者、新月ごとにあなたに起こる事を知らせる者を並べ立てて、あなたを救わせてみよ。”

- ・ツリーにぶらさげてある人形
生贄の幼児である。

- ・ツリーに巻きつけてあるモール
もみの木はバアル・タマー、バアル・ベリスと言われていたから、マルドゥクを崇拜させるための偶像である。それに巻きつけているモールは、“邪悪な蛇”と呼ばれたマルドゥクである。

- ・ケーキ
ケーキは古代の偶像崇拜には付き物である。古代のパン菓子は、小麦粉に蜂蜜を混ぜて丸く焼いた。しかし、主への捧げ物には、蜜や酵母は入れない。

このようにして、ニムロデの誕生日と言われている 12 月 25 日はイエスの誕生日としてすり替えられ、無意識のうちに偶像崇拜＝マルドゥク崇拜＝悪魔崇拜が蔓延することとなった。

(3) ロスチャイルドと爬虫類人類、神智学

ロスチャイルドラ、実質的に世界を裏から牛耳る三百人委員会は、(1)で示した系図を信じている悪魔主義者＝サタニストであるらしい。これまで見てきたように、この系図は明らかに間違いであるが、見るからに、出所はエノク書である。エノク書はマルドゥクによって改竄された神話・伝承が基になった悪魔主義的な書であり、それを信じているのが三百人委員会の最大の魔術結社“黄金の夜明け”である。

彼らは自分たちの血統を信じて疑わず、“人類創造の神であるサタン”にすべてを捧げることこそが“最善”であると信じているようである。普通なら単なる誤解で済むところだが、それにより人類が重大な危機に直面していることは、大問題である。

では、その偶像崇拜の悪魔主義的パワーがどれほどのものか見てみる。それは、歴史が教えてくれる。実は、ロスチャイルドはフランス革命以降の歴史をすべて牛耳ってきた。その例を示す。

- ・初代マイヤー・アムシェルはフリードリヒ二世を借金漬けにし、莫大な資産を築いた。そして、当時のユダヤ人としては考えられなかった、王侯貴族と関係を結ぶことに成功した。

- ・世界制覇にとって邪魔なのは、王侯貴族による王制とキリスト教である。イ

ルミナティ創始者アダム・ヴァイスハウプトらに資金を提供し、フランス革命＝共産革命を勃発させた。

- そのフランスを占領しようとしたロベスピエール、グスタフ三世、ヨーゼフ二世らを暗殺した。
- ナポレオンに資金を提供したが、ロスチャイルドの道具であることに気づいたナポレオンは、戴冠式にローマ法王を招待した。これに激怒したロスチャイルドにより、ナポレオンはロシア遠征を余儀なくされ、最後は軍内の裏切り（ロスチャイルドによる買収）により、敗退して処分された。ナポレオンの名はロンドンでも利用され、デマを流して株価を暴落させ、ロンドンのシティをすべて手中に収めた。
- ウィーン会議を国際銀行家で牛耳った。
- ビスマルクを雇い、ドイツの王制を廃止して統一させた。この際、銀行家であるモーゼス・メンデルスゾーン（有名な作曲家の父親）が大いに貢献した。
- 使用人であるレーニン、トロツキーを使って、ヨーロッパ最大のキリスト教国家であり、莫大な資産を有していたロマノフ王朝を壊滅させた。その準備として、日露戦争が仕掛けられた。
- 南北戦争のかなり前に、アメリカを南北に分裂させることを決定した。それは、新大陸を手中に収め、支配するためである。
- 世界統一政府構想の基である国際連合、そして国際連盟を成立させるため、第一次、第二次大戦を仕組み、米国を完全支配下に置いた。そして、米国連邦準備銀行をロスチャイルド銀行米国代理店として私物化することにより、米国経済を意のままにした。
- ヒットラーを使って“同胞”であるはずのユダヤ人を大量虐殺させた。その後、“ユダヤ人”問題は微妙でタブーのような扱いとなった。
- アラビアのロレンスを欺き、バルフォア宣言によりロスチャイルド帝国イスラエルを強引に建国した。ただし、イスラエルでさえ、ロスチャイルドにとっては捨て駒に過ぎない。政治的シオニズムとイスラムの対立を激化させ、両者共倒れとなり、全世界を荒廃させ、最後に悪魔主義が勝利する。
- テロをでっち上げ、究極の共産主義＝新世界秩序＝ニュー・ワールド・オーダー＝グローバル・スタンダードの強固な足場を築いた。

また歴史以外の面からは、実際に悪魔崇拝を行っているという情報もある。

様々な情報から、三百人委員会の中枢部の人間たちは古来以来の偶像崇拜を行う、すなわち幼児や処女を実際に生贄にし、生き血を啜り、人肉を食らうという。それにより、絶大な暗黒のパワーが得られるらしい。その儀式のトップにいるのが“暗黒の女王、マザー・オブ・ダークネス”などと言われる存在で、ある年齢に達すると自分の親を生贄にする。そして、自分はいつか娘によって生贄にされるのである。こんな事は信じ難い。しかし、これまで見てきたような偶像崇拜の儀式が連綿と受け継がれているらしく、実際に祭司と言われている女性、アリゾナ・ワイルダーが暴露している。（「この地球を支配する闇権力のパラダイム」、中丸薫著、徳間書店。）この儀式に参加できる者は限られており、特別の遺伝系統があるらしい。それにより、儀式の最中に、オーラ（生体場）が爬虫類のような形状に変化するという。（オーラだけではなく、肉体そのものが変化するという目撃談もあるが、それは物理的・生物学的にあり得ない。）中心となるのはロスチャイルドで、英国、オランダ王室、米国大統領、ロックフェラーなどが参加する。そして、彼らは表面的には極めて紳士的であり、最大の慈善家でもある。“最大の悪”を実践するためには、“最大の善”を実践しなければならない、という西洋独自の善悪二元論、対立思想に基づく思想があるらしい。果たして、本当だろうか。

確かに、西洋人は神を信じると同時に、サタンの存在も信じている。西洋思想は、例えばクラシック音楽の構造が、A（善）対 B（悪）という対立主題から構成されるのを見れば、よく解るだろう。しかし、それだけで、このようなことが真実であると言えるのだろうか。

ここで、また(1)の系図に戻る。系図にある“200人の天使”や“ネフィリム”は爬虫類型地球外知的生命体レプティリアンとも言われている。（「大いなる秘密・爬虫類人・上下」、デーヴィッド・アイク著、太田龍訳、三交社）米国のドラマV（ビジター）に登場する爬虫類型地球外知的生命体は、それに似ているらしい。しかし、これまで見てきたように、これは明らかに間違っている。シュメールの「神々」はあくまでも人間タイプであり、断じて爬虫類ではない。これは、デーヴィッド・アイクに限らず、欧米人の“大いなる誤解”に基づくものである。特に、デーヴィッド・アイクは先に示したエノク書などをかなり信じている。エノク書の中に、次のような記述がある。

“そうして、人間どもの息子らが増す時になって、その日々に、麗しくも美しい娘たちが生まれた。そこで、天の息子たちである天使たちはこれを見て、彼女たちに欲情し、お互いに言い交わした。「さあ、人間どもから自分たちの妻を選ぼう。そして自分たちの子をもうけよう」（中略）こうして彼らは自分たちに妻を得た。彼らの各々は、自分たちに妻を選び出し、彼女たちの下に通り、彼女たちによって身を穢し始めた。そして、彼女たちに諸々の施薬、諸々の呪文、諸々の〔薬用のための〕根の採集を教え、彼女たちに野菜を明らかにした。やがて女たちは胎に孕み、身の丈 3000 ペーキュスある大きな巨人たちを産んだ。この者たちは人間どもの労苦を貪り食った。そのため、人間どもは彼らを扶養することができなくなり、巨人たちは彼らに対して大胆に振る舞い、人間ども

を貪り食った。こうして、彼らは羽根のあるものらに対して、獣に対して、這うものらに対して、魚どもに対して罪を犯し始め、お互いの肉まで貪り食い始め、血を飲んだ。その時、大地はその無法を訴えた。”

「神々」と人間が交配したネフィリムが誤訳されて“巨人”となっている。それ故、それ以後の話しが巨体を養うために食料が無くなり、人間を食べ、彼ら自身も共食いするようになったとされてしまった。また、エノク書にはノアの誕生の様子が描かれている。“私”とはエノク（エンキ・メ）のことである。

() 内の名前は、＜神々の真相 1＞で述べた正しい名前である。

“さて、しばらくして後、私の息子マトゥウサレク（マツシャル）に妻を娶り、〔女は〕息子を産み、その名前をラメク（ル・マク）と呼んだ。正義はあの日まで低くされた。そこで、年頃になった時、これに女を娶り、これに子どもをもうけた。その子が生まれた時、身体は雪よりも白く、バラよりも赤く、髪は真っ白で羊毛のように白く、縮れ毛で、光輝に満ちていた。しかも、眼を開けると、家は太陽のように輝いた。そして、産婆の手を離れると、口を開いて主を祝福した。

そこでラメクは怖れをなして逃げ出し、父マトゥウサレクのもとに赴き、言った。「変わった子が生まれました。人間に似ず、天使たちの子に〔似ているの〕です。（中略）自分の子ではなく天使の子では、と。（中略）だから、どうかお父さん、お願いします。父祖ヘノク（エノク、エンキ・メ）のところに行ってください、そして尋ねてください」

〔マトゥウサレクは〕私のところに、大地の極にやって来た。（中略）その時、私は答えて言った。「主は地上の配置を改新されるのであろう。その同じ仕方を私は生子に見たし、そなたに示した。というのは、私の父イアレド（イリド）の世代に、〔人々は〕主の言葉を、天の契約を踏み外した。そして、見よ、〔人々は〕罪を犯し、習慣を踏み外し、女たちと交わり、これとともに罪を犯し、彼女たちから子をなし、そして霊にではなく、肉的なものに似た者らを産む。かくして大いなる怒りと、大洪水が地上に起こるのであろう、そして大いなる破滅は 1 年間続くであろう。しかし、生まれたこの子は生き残るであろう。また彼の 3 人の生子も、地上の死ぬ者らの内で救われるであろう。こうして、そこ〔地上〕に於ける墮落から大地を〔神は〕和らげられるであろう。今こそラメクに言え。義しく、神法にかなった汝の子である。その名をノーエと呼べ”

エノク書の原型は、＜神々の真相 1＞で述べたように、“主エンキの御言葉”が記されたタブレットの中の、エンキ・メの話である。しかし、デーヴィッド・アイクはエノク書の天使を爬虫類人類と見なし、ノアは彼らと地球人のハイブリッドで邪悪な存在と見なししている。ネフィリムが巨人なら、「神々」も巨人でなければならない。しかし、そうすると人間とは交われなくなってしまう。このような単純な矛盾にも気づかないでいる。（2メートルぐらいの身長を“巨人”と見なした可能性はあるが。）何よりもネフィリムとは、“自分の地域の王をネテル（ネフィリム）の子孫ということにして、来世でニビルに旅させよう”と

決めたマルドゥックのでっち上げが基になっているのである。

仮に、レプティリアンなどという爬虫類的存在がいてロスチャイルドらを操っているとしたら、シュメールの「神々」にはまったく関係の無い別の存在である。では、レプティリアンについて考える。それにより、レプティリアンの存在、デーヴィッド・アイクや女性祭司アリゾナ・ワイルダーの信憑性について検討する。

*レプティリアンについて

(<http://yukitachi.cool.ne.jp/psystory/psect12.html> 参照。)

人間の肉食性や冷酷性、攻撃性は、大脳の中の古い組織である脳幹＝“爬虫類の脳”に由来していることは、大脳生理学で判明している事実である。脳幹は生命維持や種族保存の中樞を司る器官であり、大脳皮質が覆って抑制することにより、“人間らしさ”が現れる。つまり、脳幹の性質が露わになると、冷血動物である爬虫類の持つ冷酷性や残虐性が表に現れ、人間としての性質が無くなる。このような脳の形態は、人類が魚類から両生類、爬虫類を経て進化したことの証である。胎児も、母体内でこのような形態を辿ってヒトとなる。

生命の大原則に反するような情動、例えば死に直面したような場合、脳幹の一部である視床下部は、自律神経の1つである交感神経を興奮させ、動悸を速め、呼吸を促進し、副腎髄質からアドレナリンを分泌させて血糖値を上げ、緊急事態に備える。大脳辺縁系や視床下部のこうした緊急事態による興奮は、脳全体の活性を調節する脳幹網様体という神経群も強く刺激し、張り巡らされている神経線維が大量の神経ホルモンを分泌する。その中で、アドレナリンは“恐怖”、ノルアドレナリンは“怒り”、セロトニンは“不安”を引き起こすと考えられており、逆にこのような感情が高ぶると、これらの物質は多量に分泌される。この3種類の神経ホルモンの大量分泌は、前頭前野の一番の機能である首尾一貫した思考の流れを混乱させ、つまり大脳皮質の作用を抑制し、強い情動で支配しようとする。このようにして、生命維持に関わる脳幹＝爬虫類の脳は、生命を守ろうとする。いわば、これらの物質は“爬虫類的欲望”を満たすための根源物質であるとも言える。

特に、死の恐怖に襲われた幼児や処女は、成熟した大人に比べて冷静に判断することができない分、これらの物質は大人に比べて大量に分泌される。よって、幼児や処女の生贄の血や肉には、これらの物質が大量に含まれることになる。だから、これらを摂取すると、攻撃的な爬虫類的性質をフルに発揮できる可能性がある。

仮にレプティリアンが存在するとしたら、彼らは恐怖によって分泌されるこのような物質を栄養としていると言える。そして、彼らは先に述べたような“恐怖”“怒り”“不安”といったネガティブな感情も栄養として吸収することができるらしい。これは三次元の世界ではできないことなので、低層四次元が彼らの本質であるという。また、アイクらは、インド由来のクンダリーニを性エネルギーと見なし、生命エネルギーとも見なししている。クンダリーニが性エネルギー

ギーに直結しているならば、手に入れる方法としては性的倒錯・錯乱が最も手っ取り早い。そのため、偶像崇拜では性的倒錯・錯乱が根元的崇拜対象となる。そして、生き血や生肉を食するのは爬虫類的性質であるから、それを実践することにより、“爬虫類の脳、性質”が活性化される。

確かに、このように見えてくると、偶像崇拜は神話・伝承の改竄が引き金となって人類が始めたことであるが、このような“恐怖の波動”が、それに共鳴する生命体を引きつけたとも考えればもっともらしく思える。では、本当に太古の時代から存在するのか。

結論としては、存在しない。何度も繰り返すが、神話・伝承の改竄による誤解が原因である。「神々」は人間型のニビル人であり、爬虫類タイプの別の生命体との戦闘を宇宙空間や地球上で繰り返していたわけではない。その闘争は、エンリルー族とマルドゥク一派の闘争である。残念ながら、宇宙人愛好家の間で信奉されているような、“アトランティス vs ムー”や“地球 vs 地球外生命体”のような戦いではない。すべては、マルドゥクによる神話・伝承の改竄が原因である。“邪悪な蛇”と呼ばれていたマルドゥクの性質により、西洋では、蛇は邪悪な存在と見なされるようになった。イブに“知恵”を与えたのはマルドゥクの父で蛇神エンキ、弟で同じく蛇神のニンギシュジツダであるが、“良い蛇”も“邪悪な蛇”も、いつしかまとめて“邪悪な存在”となってしまったのである。

仮にレプティリアンが存在するとしたら、彼らを崇拜すれば、願いを叶えるような存在なのか。本当の悪なら、そんなことはしないだろう。供えられた物を頂戴するだけで、願いなど叶えないはずである。利用するだけ利用して捨てる。これが“悪の鉄則”である。それに、地球と環境が似ている星はそれほど多くはないはずであり、細菌やウイルスの問題などから、宇宙服無しで地球上に存在することは困難だろう。ニビルのような例外を除いて。

暗黒の思考は、更なる暗黒の思考を増幅するという。思考は波動の一種と考えられているから、同じような波動が共鳴し合って増幅されるのである。それをレプティリアンの憑依などと、勘違いしているだけである。

それに、四次元以上の次元は三次元よりも高い波動であるという。高い波動とは、周波数が高いことである。いわゆる“精神世界”信奉者の間では、波動が高いほど生命体は進化していることになっている。そうすると、四次元の存在は三次元よりも進化していることになる。そして、進化のためには、精神性を高めなければならない、と。ならば、四次元には低層四次元などという波動の低いレベルは存在しないはずであり、矛盾している。

もし、暗黒のサタンの存在（意識）があるとしたら、それは必ず三次元に存在する。人間などの霊の本質は現在の科学では未知の分野であるが、おそらく宇宙に於ける生命エネルギー形態の一種であり、人間の目が感じることのできる周波数帯のものではない。まれに、周波数が合う人は見ることができらしい。生命体は、死んだら“元の世界”に戻るだけであり、天国や地獄は存在しない。浮遊霊などは肉体が無くなったことを理解し得ないので、空間を漂う。

これらが存在するのは四次元などではなく、三次元である。三次元空間に存在するからこそ、三次元空間に存在する三次元形態の人間に憑依できる。

なお、“元の世界”がどのような空間なのか、四次元以上の空間なのか、あるいは三次元の亜空間なのかは、現状の科学では不明である。三次元に存在する我々は、四次元以上の空間について実感することは不可能であるし、時空に関する物理理論が出来上がっていないからである。

つまり、爬虫類人類＝レプティリアンという概念は、シュメールの「神々」がいつか降臨してくることを知っている三百人委員会のオカルト部門によって創られた概念であり、“その時”に「神々」をサタンとして陥れるために創られたマインドコントロールである。

次元に関することと言えば、次元上昇＝アセンションという事象もある。次元上昇とは、肉体を持ったまま周波数を高くして高次元へと移行することである。アセンションすると、半人半霊となったり姿が見えなくなったりし、三次元的な物質も通過することができるようになるという。いわゆるニューエイジ運動には、フォトンベルト、覚醒、次元上昇が欠かせない“三種の神器”のようなものである。(フォトンベルトに関する詳細な説明は、付録として巻末に添付する。)ニューエイジ運動とは、プレアデス星人とのチャネリング(*)など、神智学＝カルトの影響をもらって受けた超自然的・精神的な思想により現体制を批判し、真に自由で人間的な生き方を模索しようとする運動である。創始者はロシア生まれのエレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー(1831～1891)で、19世紀オカルティズムに多大な影響を与えた。強力な霊的能力の持ち主で、一生を通じて身近に不思議な現象が絶えず、米国で設立した神智学協会は熱狂的な崇拝者を集めたという。(Wikipedia参照。)勿論、これは三百人委員会のオカルト部門である。

よって、これらの概念は、三百人委員会の偶像(サタン)崇拝が根源の、危険極まりない思想である。他にも、神智学から発生したものとして、地底王国の支配者サナト・クマラ(鞍馬寺で祀られている)などがある。それとて元は、シュメールに於ける4番目の「神聖」な領域を曲解したものに過ぎない。

次元上昇も、宇宙船に入っていくイエスや他の預言者の様子を、肉体を持ったまま天国へ行くと思いきや“大いなる誤解”に基づくものである。当時の人が「神」の下へと昇って消えて行く賢者を見たら、次元上昇のようにしか考えられないのは、やむを得ないだろう。

よって、次元上昇などあり得ない。ヨガでチャクラを活性化したところで、絶対に次元上昇などしない。デーヴィッド・アイクはクンダリーニを活性化したらしいが、それでもこの程度の理解しかできていないのは、次元上昇などしない証拠である。

また、宇宙船に引き入れられるイエスや他の預言者の様子は、いわゆる“空中擧げ”という“大いなる誤解”も生んだ。これは、黙示録を地上の物理的な破壊であると“誤解”したため、「神」に認められた正しい人は「神」に救い上げられ、別の星で文明を築く、あるいは破壊しつくされた地上が安定してから

戻り、新たな文明を再興するという誇大妄想になったのである。

*チャネリング

いわゆるテレパシーで宇宙人や地底人、神、仏、霊などから通信を受けること。受けた通信を、媒体の意志に関係なく筆記する自動書記も含まれる。アカシック・レコード（あらゆる記憶が納められている宇宙の図書館と言われている）にアクセスする能力と同様に、“精神が開かれた”人間にのみ可能ということになっている。

真実を一部含んでいるので、如何にもそれらしく思われるが、実は“魔＝サタンの意識”の成せる業である。プレアデス星人にしる、地底人にしる、いずれのチャネリングに於いても、次のような共通項目が見られる。

- ・アヌンナキ：人類を操り支配する存在。三百人委員会の本当の支配者。レプティリアン。
- ・フォトンベルト：フォトンで構成される銀河系内の領域。（巻末参照。）
- ・次元上昇：フォトンベルトに進入する際に起こる変化。
- ・2012年：マヤの暦がここで一区切りなので、新たな時代の始まり。次期フォトンベルト進入時期。
- ・アセンディッド・マスター：完全に次元上昇した五次元以上の存在。
- ・カリフォルニア・シャスタ山：マスターたちのいる地底王国への入り口。
- ・キリスト意識：覚醒された人々のキリスト的意識。
- ・ライトワーカー：フォトンによって変容できる（変容した）人間。
- ・グレート・セントラル・サン：宇宙あるいは銀河中心の太陽。
- ・12などの神聖数字：その名の通り、説明不能な神秘的・魔術的数字。
- ・銀河連盟：プレアデス、シリウス、オリオン、アンドロメダなどの善なる存在で構成される宇宙での連盟。
- ・レムリア、アトランティス、ムー：実在した太古の超文明。
- ・光のダンス：フォトンとの衝突、フォトンによる変換。
- ・ライトボディー：フォトンにより変容した光の体。
- ・鯨、イルカ：地球の周波数の守り手。
- ・サナート・クマラ：650万年前に金星から来て地球を守っている存在。
- ・輪廻転生（*）：“魂の修行”のために、“最適な”星で生まれ変わる。

ある時は地球を見守る銀河連盟、ある時はプレアデス星人、ある時は地底で地球を守るサナート・クマラやシャンバラの高僧、ある時は日本神界の神々、ある時はアトランティスやレムリアの生き残りで高度に進化した存在などとして交信してくるから、様々な存在が同じ事を言っているのが正しい、と思ひ込みがちである。しかし、それは間違いで、要するに出所がすべて同じということであり、その場に応じて“形態”を変えているだけである。そして、決して実態を見せないが、これこそがサタンの意識の本質である。（これについては、天使と併せて後述する。）つまり、サタンの意識は三次元空間に現実のものとして存在する。

このような媒体（チャネラー）は、一部の例外を除いてほとんど欧米人で、特に米国人が多い。彼らは基本的に左脳の合理主義だから、このような思想に対して神秘性を感じ、精神解放にはこのようにしなければならない、と思い込める。特に、彼らが重視しているのは“チベットのマスター”である。このチベットのマスターは永遠の楽園シャンバラを統治するサナート・クマラであり、これこそ神智学の根源となっているのである。しかし、サナート・クマラなどという存在が地球を守っているのなら、壊滅的な大洪水など起きないはずである。シュメールの「神」エンキが助けなければ、人類は大洪水で絶滅していたことは明らかである。これからも、神智学由来の“産物”はイカサマであることが良く解る。つまり、シュメールのアヌンナキこそが本当の「神々」であり、前述のような“高次のマスターたち”は実際には存在せず、“何らかの意図を持ったサタンの意識”がそのような振りをして潜在意識に働きかけているだけのことである。

霊的に“精神が開かれた”人間にのみ可能、という選民的思想により、実は自分たちにとって都合の良い媒体を選んでいただけである。科学者が媒体に選ばれた、という事例が1例も無いのは、“偽り”を即座に見抜かれるからである。彼らに言わせれば、科学者は従来 of 枠組みに捕らえられており、交信しても頭から否定されるので交信しない、などというもっともらしい理由を述べる。そして、必ず「相対性理論は間違っている」と述べるのも特徴である。

また、いずれもアヌンナキを人類の遺伝子を操作して奴隷化した存在としか見なししていないのは、ゼカリア・シッチンの著書の上辺だけを読んで知っているからに過ぎない。本当の“高次の存在”なら、シュメール、イエスそして神道の真相を知っているはずである。イスラエルの三種の神器が何処にあるのかも。これらについて言及したチャネリング、予言、アカシック・レコード情報など皆無である。つまり、これらはすべて“偽り”であり、チャネリングの媒体になっている人物の精神状態や知識が大きく影響しており、真実など語っていないのである。

また、フォトンベルトに連動するプレアデス信仰は、古代エジプトのエノク黒魔術に端を発し、プレアデスの中心恒星アルシオネ（アルキオネ）はイルミナティ（三百人委員会の中核組織）のラッセル家が“神＝サタン”として信仰している。そしてアルシオネこそ、プレアデス・チャネリングの中心である。

* 輪廻転生

釈迦は輪廻転生を説いておらず、弟子がバラモン教（ヒンズー教）に基づいて勝手に解釈したものである。輪廻転生では人口増加について説明できない。仮に他の天体から転生してくるとしても、では、その前はどうかだったのか、という疑問がある。それに、カルマを解消するために両親を選ぶのであれば、貧しい国に生まれ、病気や飢餓で死ぬ子供は無残に死ぬだけのために生まれてきたのか。ならば、何のための生命か。これらの問題に辻褃の合う説明ができない限り、輪廻転生の概念も疑うべきである。つまり、輪廻転生の概念も、神智学由来であると言える。

さて、このような邪悪な儀式に関わっていた、しかも最も重要な立場である祭司が、仮に正気に戻って組織を逃げ出せたとしても、堂々とマスコミに登場できるはずはない。“裏切りには死を”が彼らのモットーだからである。アリゾナ・ワイルダーはカリフォルニアに住んでいるらしいが、儀式の中心地であるエリア 51（*）の近くには、即座に儀式殺人により処分されるだろう。何しろ、彼らの“奥義中の奥義”に関わるからだから。それが処分されることもなく、マスコミに出てきたことは、意図的な何かがある。このような祭司が表舞台に堂々と登場してきたということは、彼らの“宗教”を普及する準備が整った、という合図なのかもしれない。いずれにしろ、非常に危険極まりないことである。聖書にはこうある。

“女の祭司や霊媒師、口寄せは必ず死刑に処せられる。”

実際に女祭司や霊媒師、口寄せによる“お告げ”が悪影響を及ぼしていたからこそ、聖書にはこのような言葉が残されているのである。

なお、このような人身供犠の信憑性については、アリゾナ・ワイルダーだけではなく、イルミナティの全貌を初めて公開したフリッツ・スプリングマイヤーがいる。この人は陸軍士官学校に入学したエリートで、一時入会した“エホバの証人”が悪魔主義実践機関であることが解ると、脱会して悪魔主義の調査を独自に開始した人である。様々な伝により情報を収集し、時には命がけのこともあった。そして、その成果を世界に公開した。そのため、現在は無実の罪で投獄され、出られない状態にある。だから、三百人委員会が人身供犠を実行していることは、宗教の歴史の流れからしても、可能性が無いとは言えない。（アリゾナ・ワイルダーの情報のみならば、大いに眉唾物となるが。）ならば、祭司だった女性は即座に処分されていてもおかしくないはずだが、何故か米国国内で生きており、マスコミにも登場している。

*エリア 51

米国ネバダ州にある軍の最高機密エリア。原水爆の開発が行われたことで有名である。その後、軍の様々な兵器開発や遺伝子実験が行われている。ここでは、軍がグレイや爬虫類人と言われるような宇宙人と共同でUFOを開発したり、遺伝子工学実験を行っている、まことしやかに噂されている。

その大元となっているのが、1947年7月、米国ニューメキシコ州ロズウェル陸軍基地所轄内領域にUFOが墜落し、乗組員共に回収されたというロズウェル事件である。機密文書MJ-12の暴露により、事件の全貌が明らかになったかに見えた。そして、何年か前の番組では、回収した宇宙人の解剖映像なども公開されたが、いかにも作られた映像という感じである。これらの情報をリークしたのは元軍人とか諜報機関に所属していた人たちである。民間のUFO研究者によるその後の様々な調査により、その機密文書、解剖映像共に偽であることが判明している。（<http://www.fitweb.or.jp/~entity/ufo/rozuweru.html> 参照。）

また、エリア 51 はつい最近まで、全貌を見渡せる場所が閉鎖されておらず＝エリアが公開状態にあり、空からの写真も撮影可能である。最高機密の場所に

しては、いかにもお粗末な状態である。そして、いまだに近くでは、光る物体＝宇宙人の飛行物体と思わせるための物が堂々と飛行しており、最高機密技術であるはずのものが“公開”されている。

ならば、これらの情報は、本当に最重要の機密を守るための（一部真実を含んだ）組織ぐるみの意図的な偽リーク情報であると考えるのが妥当である。偽情報を信じれば真実には辿り着けないし、眉唾物として無視すれば、真実も闇に葬り去ることができる。つまり、偽情報をリークすることにより、大衆は“エリア 51 とか UFO とか宇宙人は怪しいもの”という考えを持つようになり、誰も相手にしなくなるマインドコントロールである。しかし、そのために宇宙人を使っている以上、何らかの地球外飛行物体が墜落した可能性は高い。

同じ軍や諜報機関脱退者でも、ジョン・コールマン氏やフリッツ・スプリングマイヤー氏の著書にはそのような情報は無く（あってもアイクなどの引用）、三百人委員会の政治的・経済的・社会的・宗教的側面だけであり、いずれも内容が一致しており、これまでの歴史の意味を辻褄が合うようにすっきり説明できるから、彼らの情報の信憑性は高いだろう。

また、宇宙人愛好家の間では、このような邪悪な存在を認めると同時に、善なる宇宙人の存在も認め、実際にコンタクトした、などと主張している者もいる。彼らに共通して言えることは、その善なる宇宙人はほとんど北欧系の金髪碧眼系であり、現状では公に姿を現すことができないらしい。それは、人類の意識が宇宙人に対してオープンマインドになっていないから、というものである。これは、地底人に関しても同様である。

しかし、これはおかしなことである。爬虫類型の邪悪な連中が軍と共同研究しているなどという“驚愕的な事実”がテレビなどで放映されているのなら、善なる金髪碧眼系の連中が邪悪な企みを止めさせようと大挙して降臨しても、人類はハリウッド映画で“十分慣らされている”し、何と言ってもシュメールの「神々」の証拠が残されているから、問題無いはずである。それどころか、邪悪な企みが阻止できるのなら、大歓迎だろう。

ならば、姿を見せられない、というのは隠された意図がある。北欧系の金髪碧眼系というのが鍵で、それは実際に北欧系の人物だからである。そして、彼らの“宇宙船”は地球外のものではなく、エリア 51 など試作された“地球製”なのである。よって、実際に降臨するとバレてしまうから、降臨しないだけのことである。

他に、地底人の場合は、チベットの高僧というケースもある。何故、チベット密教の僧侶でなければならないのか。その元は仏教、ヒンズー教、そしてユダヤ教なのに。そのような地底人にとって、チベット密教の闇の奥義“無情瑜伽タントラ＝サタン崇拝”こそが、彼らの本質だからだろう。

デーヴィッド・アイクは元々サッカー選手で、引退後はニューエイジ運動に参加したりしていた。アイクはそのようなニューエイジ的精神覚醒から足を洗ったらしいが、いまだにプレアデス星人とのチャネリング由来のフォトンベル

ト支持者であり、太陽系が銀河の中心を 26000 年で 1 周しているという“大いなる勘違い”を堂々と主張している。やはり、理科は相当苦手らしい。

フォトンベルトに連動するプレアデス信仰は、古代エジプトのエノク黒魔術に端を発しているから、アイクがエノク書の内容をそのまま信じているとしたら、まんまと黒魔術＝闇のカッパーラの術中にはまっていることになる。いや、解っていて、大衆をコントロールすることがアイクの本当の目的なのかもしれない。

また、彼の爬虫類人類の発想の元は、おそらくアリゾナ・ワイルダーであり、そこに欧米人特有の“蛇は邪悪”という思想が重なったものである。彼は、イエスは存在しなかったし、キリスト教はでっち上げであると主張している。相当、思い込みが激しいようであるが、これもコントロールが目的だろう。

しかし、政治的・経済的・社会的・宗教的な三百人委員会に関することは大体合っている。これは、コールマン氏の情報などを参考にしているためである。アイクは講演会などを妨害されているらしいが、それも三百人委員会の手先であることをカモフラージュするためかもしれない。(コールマン氏は逮捕されるまでには至っていないが、自宅を襲撃されたりして命の保証が無い。)

あるいは、三百人委員会の真相に“爬虫類人類”を抱き合わせることにより、すべてが偽情報であるように思わせ、三百人委員会の真相を隠蔽する目的なのかも知れない。そうすると、アイクはアリゾナ・ワイルダーを通して、三百人委員会にまんまと利用されていることになる。

いずれにしろ、デーヴィッド・アイクも要注意人物であることは間違いない。

では、本当に最重要の機密とは何なのか。おそらく、ここまで見てきたような、シュメールの「神々」の真実である。

ロズウェル事件の証言者として、メルヴィン・E・ブラウン軍曹の証言が興味深い。乗組員の遺体は軍によって氷詰めになって、基地に搬送された。その際、この軍曹は遺体を目撃しており、外見的な特徴から「彼らはアジア系で、つり上がった目に大きな頭、髪を剃っているなどの特徴から、中国人と思われた」とある。(http://www.fitweb.or.jp/~entity/ufo/rozuweru.html 参照。) おそらく、米国軍や三百人委員会はそのことを知られたくないのであろう。高度なテクノロジーを操り、人類を創造したのが東洋系の「神々」で、彼らが常に地球を監視しているとしたら、三百人委員会にとって、これほど不都合なことはない。そのため、様々な情報を錯綜させ、真実を隠蔽したのであろう。そして、イラクの博物館を米国軍が襲撃したのは、“真実が書かれたシュメールの粘土板”を略奪するためであったと推定される。

「神々」は現在、ニビル系に戻っているわけではない。この事件だけではなく、アツラーの神、アステカのケツアルコアトル、応神天皇の前に降臨したイエスなどからも、それは言えるだろう。だから、必ずしも次回のニビルの接近(約 1600 年後)まで「神々」は来ないわけではない。そして、「神々」はテレパシーやチャネリングなどという方法は使わず、必ず実体を伴って現れるのである。

よって、長くなってしまったが、三百人委員会の人身供犠は、神話・伝承の改竄が原因となった人類の誤解に基づく悪い習慣がそのまま続いてきたものであると言える。そして、そのような儀式により、人間のオーラの爬虫類的部分が極度に活性化され、攻撃的な性質が露わになるだけであって、爬虫類人類に操られていることは無い。しかし、仮にそのような儀式を実際に行っていたら、危険極まりない。

以上のようなことは、性の退廃、生命軽視以外の何ものでもない。今日の世界は性的に退廃しており、それ故、生命が軽んじられ、ネガティブな感情が地球を覆い尽くしており、まさに彼らの思うツボと化している。このように仕向けたのは、タヴィストック研究所が開発したロックであり、フリーセックス概念を垂れ流しているマスコミであり、これらは三百人委員会の出先機関である。

彼らは巧みにマインドコントロールし、実際に流されている情報の中に真相を隠す。わかる所に堂々と隠すというのはカッパーラの常套手段であるから、彼らは古代バビロニアやエジプトの黒魔術＝“闇のカッパーラ”に通じているということである。

つまり、彼らはイエスの存命当時、神殿で金貸しを行っていた連中、神殿娼婦（夫）を認めていた連中、神殿に人身供犠を捧げていた連中の末裔で、イエスにより追放されたカナン人の末裔であり、(1)で示した系図のカナン人の系譜は正しい、ということである。

なお、チャネリングなどではないが、聖書解釈としての創造論も、＜神々の真相 3＞で述べたように、三百人委員会が来るべきハルマゲドンの後、聖書を引き合いに出して、自分たちが“神々”として振る舞う正統性を主張するための論理である。

(4) サタンの意識

サタンの意識が前項で出てきたので、ここで、天使とサタンの意識について説明する。天使は背中に羽が生えた存在として描かれるが、実は羽など生えておらず、見た目は人間と変わらない。それは、＜神々の真相 1＞で示した「神々」の姿の誤解である。これは、聖書にも記述されている。

・ソドムが滅ぼされる場面

2人の天使が夕方ソドムに着いた時、ロトはソドムの門の所に座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって迎え、地にひれ伏して言った。「皆様方、どうぞ私の家に立ち寄り、足を洗ってお泊まり下さい。そして、明日の朝早く起きて出立なさって下さい」彼らは言った。「いや、結構です。我々はこの広場で夜を過ごします」(中略)彼らがまだ床に就かないうちに、ソドムの町の男たちが、若者も年寄りもこぞって押しかけ、家を取り囲んでわめき立てた。「今夜、お前のところへ来た連中はどこにいる。ここへ連れて来い。なぶりものにしてやる」(中略)アブラハムはその朝早く起きて、先に主と対面した場所へ行き、ソド

ムとゴモラおよび低地一帯を見下ろすと、炉の煙のように地面から煙が立ち上っていた。

・トビト記

メディアまでの道に詳しく、一緒に行ってくれる人を探しに、トビアは外に出た。出てみると、天使ラファエルが目の前に立っていた。しかしトビアには、神の御使いであることが解らなかった。そこでトビアは尋ねた。「若者よ、あなたはどちらの方ですか」ラファエルは答えた。「私はイスラエル人で、あなたの同族の者です。仕事を見つけにここに来ました」

・イエスが復活する場面（マルコ福音書）

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝早く、日が昇るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「誰が墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなた方は十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなた方より先にガリラヤへ行かれる。かねて言われていた通り、そこでお目にかかれる』と」

ソドムの町の悪者たちは、主の御使いの天使であることが解っていたら、なぶり殺しにしようなどと思わないはずだし、トビアやマリアらは天使を見ても、普通の人と区別がつかなかったのである。まして、天使＝ネフィリムが巨人や爬虫類人類であれば、一目で判別可能である。この場合の普通の人イスラエル人であるから、やはり「天使、神々」は中東～東洋系の容貌である。

イエスもそうだが、“善”の存在である天使などは、このように実体を伴った存在として聖書に登場する。対して、サタンなどの“悪”の存在は“実体を持たない意識”として登場する。イエスを誘惑したのもサタンの意識である。

実体を伴わないといっても、ヤハウエは姿が目に見えないだけであり、声は聞こえている。降臨する際には、雲や雷を伴った。（出エジプト記）

“主は言われた。「私はあなたの前にすべての私の善い賜物を通らせ、あなたの前に主という名を宣言する。私は恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ」また言われた。「あなたは私の顔を見ることはできない。人は私を見て、なお生きていることはできないからである」更に、主は言われた。「見よ、1つの場所が私の傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。我が栄光が通り過ぎる時、私はあなたをその岩の裂け目に入れ、私が通り過ぎるまで、私の手であなただを覆う。私が手を離す時、あなたは私の後ろを見るが、私の顔は見えない」（中略）旅路にある時はいつも、昼は主の雲が幕屋の上であり、夜は雲

の中に火が現れて、イスラエルの家のすべての人に見えたからである。”

モーゼは主の後ろ姿(＝アダム・カドモン)を見るが、顔は見ない。しかし、主はそこに実体を伴って存在しているのである。また、主の雲や火は、宇宙船から発せられる光などである。

対して、サタンの意識は物質としての実態を持たないから、同調する人間に憑依するだけで、姿を見せることができない。そして文字通り、波長が合う＝周波数が同調する人間に意識を合わせるチャネリング(テレビのチャンネルと同じ)という方法を使い、神や仏や霊からの啓示を聞いたと錯覚させたり、自動書記させたり、印(変わった形の虹、聖母マリア、羽のある存在など)を現したりする。(あるいは、ジョン・コールマン博士によると、電磁波によって“思考”を操作する兵器も開発されているというが、そのようなものによって思考を操作されている可能性もある。)羽は鷲の頭をしたシュメールの「神々」の姿が誤解されたものであり、天使やサタンなどではない。そのように思い込んでいる人に、そのような姿形として見せるのである。このように、チャネリングやテレパシーが、如何に誤った危険なものであることが良く解るだろう。

これまで見てきたように、エノク書、ユダの福音書など、グノーシス主義と言われている異端的文書は、偶像崇拜の真相を説く大きな鍵となることが解った。どうやら、三百人委員会(当時からの悪魔主義者)はグノーシス主義などを利用し、このような“事実”を封印したようである。封印を解くには、悪魔主義だの何だのと言って追求するのではなく、“光のカッパーラ”で読み解かなければ、永久に封印は解かれぬのである。

6：偶像(悪魔)崇拜の影響

(1) 闇のカッパーラ

ナチスのハーケンクロイツは卍の“裏型”であり、それを45°回転させている。そして、日の丸は白地に赤だが、ハーケンクロイツは赤地に白である。つまり、すべてを“裏”として使用し、しかも回転させているので、魔術的には絶大な暗黒のパワーが発揮される。先にも述べた通り、三百人委員会はこのような黒魔術に精通している。

また、ロスチャイルドが祖としているニムロデの象徴は×であった。十字を裏にしても十字のままである。それを45°回転させると×になる。つまり、ニムロデの象徴である×は、イエス＝ヤハウエ＝本物の主の象徴である十字の裏を黒魔術的に暗黒のパワーとして利用していることになる。

しかし、実際は十字を回転させただけのものである。この図形は両方の解釈ができるから、“悪い方の解釈”を利用しているのである。

ロスチャイルドは米国の国璽や紙幣に、イルミナティの目的を描くように求めた。100年後、200年後にその全容が明らかになるような壮大な仕掛けを施したのである。これは“闇のカッパーラ”である。(神道の千数百年にわたる仕掛

けに比べたら、たいしたことではないが、これにより世界が破滅の淵に追いやられていることは大問題である。)

金(かね)も偶像崇拜の1つであるが、金に関わる偶像崇拜の邪神はマモン・ラーである。これは地獄の4人のサタンの1人で、富=カネの神であり、この名が“マネー”の語源である。マモン・ラーは双頭の鷲であり、フリーメイソンのシンボルでもある。双頭の鷲の意味は、狡猾、虚偽、欺瞞である。しかし、名前に“ラー”がある以上、これもマルドゥク=バアルを象徴しており、狡猾、虚偽、欺瞞に相応しい。現在の貨幣経済はバビロニア式貨幣経済が基になっているが、マルドゥクはバビロニアの主神であった。マルドゥクが偶像崇拜の神バアルで、三百人委員会が牛耳る経済がバビロニア式貨幣経済ならば、黙示録に書かれている次の記述の理解も容易である。<聖書について>で述べた、“バビロンの大淫婦”である。

“さあ、来なさい。多くの水の上に座っている大淫婦に対する裁きを見せよう。地上の王たちは、この女と淫らなことをし、地上に住む人々は、この女の淫らな行いのブドウ酒に酔ってしまった。(中略)私は、赤い獣に乗っている1人の女を見た。この獣は全身至るところ、神を冒瀆する数々の名で覆われており、7つの頭と10本の角があった。女は紫と赤の衣を着て、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものや、自分の淫らな行いの汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。その額には、秘められた意味の名が記されていたが、それは「大バビロン、淫らな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」という名である。(中略)ここに、知恵が必要である。7つの頭とは、この女が座っている7つの丘のことである。そして、ここに7人の王がいる。(中略)倒れた。大バビロンが倒れた。そして、そこは悪霊どもの住処、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた忌まわしい獣の巣窟となった。すべての国の民は、怒りを招く彼女の淫らな行いのブドウ酒を飲み、地上の王たちは、彼女と淫らなことをし、地上の商人たちは、彼女の豪勢な贅沢によって富を築いたからである。(中略)地上の商人たちは、彼女のために泣き悲しむ。もはや誰も彼らの商品を買う者がいないからである。その商品とは、金、銀、宝石、真珠、麻の布、紫の布、絹地、赤い布、あらゆる香ばしい木と象牙細工、そして、高価な木材や、青銅、鉄、大理石などでできたあらゆる器、肉桂、香料、香、香油、乳香、ブドウ酒、オリーブ油、麦粉、小麦、家畜、羊、馬、馬車、奴隷、人間である。(中略)このような商品を扱って、彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみを見て恐れ、遠くに立って、泣き悲しんで、こう言う。「不幸だ、不幸だ、大いなる都、(中略)あれほどの富が、一時の間に、みな荒れ果ててしまうとは」(中略)「これほど大きい都が他にあってだろうか」と叫んだ。(中略)大いなる都、バビロンは、このように荒々しく投げ出され、もはや決して見られない。(中略)お前の商人たちが地上の権力者となったからであり、また、お前の魔術によってすべての国の民が惑わされ、預言者たちと聖なる者たちの血、地上で殺されたすべての者の血が、この都で流されたからである。”

<聖書について>では、“バビロンの大淫婦”を次のように解釈した。すなわ

ち、黙示録が記された当時はローマ帝国のことであり、現在では女王を元首に抱く英国のロンドンである。そして、地上の最大の商人であるロスチャイルドの本拠地もロンドンであり、彼らが属するイルミナティ＝三百人委員会が世界中の食料やエネルギーなどをすべて牛耳っており、地上の権力者となっている。金による妄信と、タヴィストック研究所による社会工学＝洗脳＝“魔術”により、世界中の人は惑わされている。彼らの表向きのトップはエリザベス女王であり、現在でも幼児犠牲などの悪魔崇拝を行っているという説もあるから、まさに“大淫婦”に相応しい。

シュメールの真相まで合わせると、次のような解釈も可能である。バビロンを一時期支配したのはイナンナで、彼女が性的退廃の根源となったから、“バビロンの大淫婦”の象徴にはなる。しかし、今日まで繋がるバビロニア式貨幣経済は、マルドゥクが主神となってから発達した。そして、「合わせ鏡」で考えると、“淫婦”は“淫夫”となり、偶像崇拜の男神となる。つまり、“バビロンの大淫婦”とは、バビロニア式貨幣経済を発達させ、物に対する執着、姦淫などに代表される偶像崇拜の根源、マルドゥクが原型である。

また、1ドル札にも描かれているフリーメイソンの象徴であるピラミッド・アイ＝万物を見通す目＝ホルスの目は、「生命の樹」の上部3つのセフィロトであるケテル、ココマー、ビナーで形成される上向き三角形の空間として象徴される至高世界から覗く目であるから、“絶対神の目”であると言われている。しかし、そうではない。

「生命の樹」が形成する世界は、アダム・カドモンであるから、後ろ向きである。「生命の樹」では向かって右側が重要だから、目としても右目が重要となる。ならば、三角形で囲まれた至高世界に“映る”目も、後ろ姿の右目でなければならない。それを描くと、目頭が向かって左、目尻が右となる。これを後ろ向きではなく前向きの顔であると見なすと、“左目”が覗いていることになる。



万物を見通す目＝ホルスの目は、なかなか判りにくいですが、目頭の方が目尻よりも幅が太いことを考慮すると、三角形の中に目頭が向かって右、目尻が左である。これは、図の真ん中に示すパピルスに描かれたホルスの目の原型を見ると解りやすい。よって、“前向きの顔”としては“右目”が覗いていることになる。

り、「生命の樹」の左目＝絶対神の逆（裏）になっているから、“ルシファーの目”である。なお、“万物を見通す目”の根源は、エンキの“ニニギク（輝く目の支配者）”とエンリルの“すべてを見通す目”であることは、＜神々の真相 1＞で述べた。

また、覗いている目の下のピラミッドの段数は13段であり、ピラミッドの冠石に相当する三角形がピラミッドの頂上に接地しておらず、空中に浮かんでいる。この意味は、次の通りである。

「生命の樹」に於いて、マルクトからケセドまでの7個のセフィロト、6個のパス、合わせて13の段階を経ることにより、“知識の門”の前に達する。これ故、13は神聖数字であり、13段はこれに由来する。そして知恵を身に付けることにより、知識の門を通過して精神的に神界に達する。カッパーラは“一方的に授けられるもの”であるから、神界＝至高世界に達することができるかどうかは、神の意思のみに依る。それ故、至高世界はそれより下の人間世界から隔絶され、浮かんでいるのである。

本来、石工の職人組合であったフリーメイソンにとって、ピラミッドは「生命の樹」そのものであるから、彼らにとって理想的で完璧な建造物である。しかし、フリーメイソン自体がサタニスト（悪魔主義者）たちによって乗っ取られ、“ルシファーの目”を植え付けられたことにより、「死の樹」へと変貌した。これが、1ドル札に描かれ、現在のフリーメイソンの象徴として描かれるピラミッドと“万物を見通す目”の真相である。なお、ピラミッドは柱ではないため、「死の樹」に変貌したことが解りにくいだが、“目の向き”で判断する。

* 千円札の肖像について

千円札の野口英世の顔に注目すると、左目（向かって右側）がおかしい。これは左目だから絶対神の目かという、そうではない。「生命の樹」での左目は、あくまでも“後ろ向きの”アダム・カドモンの“右目”が映ったものである。しかし、ここでは“正面向きの”人物としての“左目”だから、“ルシファーの目”となる。

また、裏からお札を透かして覗くと、富士山の頂上にこの目が透けて見える。富士山は古富士、小御岳の間に噴火によって新富士＝現在の富士山が形成された。山はモーゼが十戒を授かり、イエスが山上の垂訓をしたりしていることから、「神」と見立てられる。それ故、3つの山の重なりから、富士山は「生命の樹」である。そこに“ルシファーの目”が覗くことにより、「死の樹」となっている。そして、湖に映る富士山の景観は富士山の形になっていない。これも、下向きに伸びる「死の樹」の象徴である。

日銀は株式会社であり、株式の30～40%はロスチャイルドが保有していると言われ、ロスチャイルド銀行日本支店である。彼らは、日本の経済も牛耳っているという象徴を堂々と示しているのである。わかる所に堂々と隠すというのはカッパーラの常套手段であるから、ここからも、彼らは“闇のカッパーラ＝黒魔術”に通じていることが解る。

欧米人は、カッパーラというと暗黒の面＝黒魔術＝“闇のカッパーラ”しか想像できず、白魔術や光の神道などの“光のカッパーラ”を理解することはできない。その点が、コールマン氏をはじめ、このような情報を暴露している人たちの唯一最大の弱点であり、完全な真相に達することができない。また、西洋人に限らず“正統”キリスト教徒は、蛇を邪悪な存在であるとしか理解できないから、イエスが毒の無い蛇として象徴されることも理解できない。従って、シュメール神話の真相もまったく理解することができない。

(2)タルムード

タルムードは“偉大な研究”という意味であるが、実は律法（トーラー）がバビロン捕囚後に過激化したものであり、その後のユダヤ教の根幹となった。よって、教義が本来のユダヤ教からかなり歪んでいる。その一例を示す。

- ・ユダヤ人のみが人間である。
- ・ゴイム＝非ユダヤ人は、ユダヤ人に所有され、ユダヤ人に奉仕するためのみ存在する家畜人である。
- ・ゴイムは家畜であるから、財産を所有する権利も資格も無い。
- ・ゴイムに財産があるとしたら、当然、ユダヤ人の所有たるべきである。

ヨーロッパでゲッター（ユダヤ人居住区）に隔離されていたユダヤ人は、頑なにタルムードを信じていた者が多く存在した。それを過激なまでに押し進め、世界制覇の野望を抱いたのがロスチャイルドである。だから、ロスチャイルドはユダヤ教すら信じていないのであり、タルムードやユダヤ教も、ロスチャイルドにとっては、単なる利用するための道具に過ぎない。あくまでも、ロスチャイルドは悪魔主義者、サタニストである。

なお、正統派ユダヤ教には、聖書を解説するためのゾハール（光輝の書）がある。しかし、ユダヤ教のラビは、タルムードの知識が深いほど尊敬されており、どうしても深層心理としてタルムードを基盤とした解釈となってしまう。だから、部分的には正しくても、全体として誤った解釈となる。それに、ユダヤ教ではイエスを認めていない以上、最終的な真理に到達することはできない。

(3)アトランティス、ムー、レムリア文明（大陸）

(1)でアトランティス、ムー、レムリアが登場したので、存在の可否を検討する。結論から言って、アトランティスやムー、レムリアという超古代文明も、偶像崇拝に基づくシュメールの誤解に過ぎない。

①アトランティス (<http://www.nazotoki.com/atlantis.html> 参照。)

アトランティスについて最初に語ったのは、ギリシャの哲学者プラトンである。一般的には、BC6世紀のギリシャの政治家ソロンが、エジプトの神官から聞いた伝説を、友人のドロピデスに伝え、その息子のクリティアスが引継ぎ、同名の息子クリティアスが編纂したものとされているが、実際にはプラトンが編纂したものである。ソロンの時代より9000年以前、ギリシャ人が“ヘラクレス

の柱”と呼んだジブラルタル海峡の彼方にアトランティスという名の島があった。それはアジアとアフリカを合わせたよりも大きく、海神ポセイドンの 5 組の双子が島を 10 分割して支配していた。強力な軍事組織を備えた現代文明を遙かに凌ぐ超古代文明であり、ヨーロッパやアフリカの一部まで支配下に置いていたが、大地震と大洪水とが重なり、一夜にしてこの島は海中に沈んだという。プラトンはこの伝説について「ティマイオス」と「クリティアス」という著書に記している。いずれも、ソクラテス、ティマイオス、クリティアス、ヘモクラテスら 4 人の知識人たちの議論を記録したものである。よく“プラトンはこの話を真実だと保証している”などと言われるが、「クリティアス」と「ティマイオス」にプラトンは登場しない。実際にこの物語を真実だと保証しているのは、“物語の登場人物”であるクリティアスなのである。

「ティマイオス」では、物語の登場人物であるソクラテスが、前日に語った“理想の国家”について、再確認するところから始まる。その後ソクラテスは、自分が語った“理想の国家”は実際に存在してくれたら嬉しいと語る。この物語の主演は（古代）ギリシャである。話の流れとしては、ソクラテスが好き勝手に夢想する“理想の国家”の具体例としてギリシャが登場する。祖国ギリシャは、かつて巨大な植民地を持っていたアトランティスという大帝国を相手に勇敢に立ち向かい、孤軍奮闘する。そして見事アトランティスに勝つ、という話が続く。（ただし、戦争の具体的な描写は無い。）

つまり、「ティマイオス」に於けるアトランティス物語は、プラトンの“理想の国家＝祖国ギリシャ”が主演の物語であり、アトランティスはギリシャの引き立て役であるフィクションである。しかし、いつの間にかギリシャよりもアトランティスが主演へと変貌し、多くのアトランティス信奉者に勘違いされるようになってしまったのである。

また、よく言われることとして、アトランティスには有名な“オリハルコン”と呼ばれる超金属があり、「クリティアス」の中ではその性質として“オリハルコンは飛行船を宙に浮かせることができる”と書かれている、ということがある。では、その「クリティアス」の中で、オリハルコンはどのように記載されているのか。（Wikipedia 参照。）

“今はただ名のみとなっているが、当時は実際に採掘されていたオレイカルコスの類は、当時、金に次ぐ非常に貴重な金属であって、島の至る所に分布していた。”

このオレイカルコスの語源は“山の銅”（oros : 山、chalkos : 銅）であり、オリハルコンとは、現代ギリシャ語における単数対格形（oreichalkon）のことである。プラトン全集 12「クリティアス」（岩波書店）に記載されている他の例も示す。

“アクロポリスを直に囲む石壁には、炎のように燦然と輝くオレイカルコスを被せた。”

“内側の天井には一面に象牙を被せ、金や銀やオレイカルコスの飾りつけをして変化をもたせるとともに、その他、壁や柱や床には隙間無くオレイカルコスを敷きつめていた。”

“碑文として、初代の王たちの手でオレイカルコスの柱に刻まれたのであるが、この柱は、島の中央のポセイドン宮に安置されていた。”

“現代文明を遙かに凌ぐ超古代文明”のきっかけになったのがオリハルコンであるが、プラトンの著作からはオリハルコンが“超金属”であるという記述はどこにも無い。このような特徴とその名から、オリハルコンはおそらく赤銅だろう。よって、「クリティアス」に“オリハルコンは飛行船を宙に浮かせることができる”と書かれている、などという主張は、後世のアトランティス信奉者によるまったくのデッチ上げである。そして、“ヘラクレスの柱”“海神ポセイドン”“島の中央のポセイドン宮”とあるように、ギリシャ神話の「神々」が基本となっている。これは、シュメールの「神々」の焼き直しに過ぎないから、フィクションである。ポセイドンはエンキである。

また、存在したと言われる大西洋の中心には、海底地形図を見れば解るように、大西洋中央海嶺が存在し、そこから新しい地質が絶えず生成し、東はユーラシア・アフリカ大陸、西は南北アメリカ大陸の方向に移動している。このような活発な地殻変動が発生している地域に、アジアとアフリカを合わせたよりも大きい“島”など、存在し得ない。

よって、アトランティス文明とは、シュメール神話が改竄されたギリシャ神話を基にして古代ギリシャ人が空想した世界を、後世の信奉者が担ぎ上げて創り上げた、“大いなる誤解”に基づく架空の文明である。

②ムー、レムリア

太平洋に存在したと言われている、現代文明をはるかに凌ぐ超古代文明。ムー大陸の東端はハワイ、西はマリアナ諸島、南はフィジー、トンガ、クック諸島を結ぶ線、東南端はイースター島にまで及んでいた。人口は6400万人で、異なる10種類の民族が住み、宇宙創造神の地上代理人である帝王ラ・ムーが統治していた。ムー帝国は高度な学問と文化を持ち、特に建築と航海術に優れていた。太陽の象徴を旗印にして世界の海を航海し、西はアジア、ヨーロッパ、エジプト、東は南北アメリカにまで植民地を広げた。しかし、約12000年前、地下のガス・ベルトの爆発により、一夜にして海中に沈んだという。

1864年、フランスの神父シャルル・エティエンヌ・ブラッスールは、スペインのマドリッド王立歴史学会で、ディエゴ・デ・ランダという司教が書いた「ユカタン事物記」の抄録を発見した。これには、マヤ文字をアルファベットに変換したマヤ・アルファベットが載っていた。マヤ文字解読のロゼッタ・ストーンを手に入れたと思ったブラッスールは、早速このアルファベットを使って「トロアノ古写本」から、失われた大陸の記録の解読を始めた。その中で、彼はあの一対のシンボルを見つけた。それぞれのシンボルは、マヤ・アルファベット

の M と U に似ていると判断し、それこそが、失われた大陸の名を表しているのだと、勝手に憶測した。それが“MU”である。

しかし、そのマヤ・アルファベットは、後の調査で実はまったく当てにならないものであることが判明した。更に、“失われた大陸の記録”だと思い込んでいた「トロアノ古写本」が、実は単なる占星術の本であることも判明した。つまり、何の意味も無いものを、強引に解釈していただけである。

(以上、<http://www.nazotoki.com/mu.html> 参照。)

また、1874年に英国の動物学者スクレーターが、マダガスカルと南インド、ならびにマレーシアは元来1つの大陸で5000万年前に水没したという仮説を立て、レムリア大陸と命名した。これに対し、超古代文明の存在を教義化しつつあった神智学者ブラヴァツキーが関心を示し、この大陸はインド洋ではなく太平洋に実在したと主張した。更に、神智学協会ドイツ支部の会長でヨーロッパ・オカルトの中心人物であったルドルフ・シュタイナーは、アトランティス以前に存在した一大文明地域だったとする説を唱えた。次いで、英国の軍人ジェームズ・チャーチワードが、インドで古代の碑板を発見し、5万年前に高度な文明を誇ったムーと呼ばれる大陸が太平洋上にあったことを“解読”し、レムリアを古代伝承に従ってムーと呼び直した。現在の文明は、水没した古代ムーを伝承したものにすぎないと述べている。

(<http://yogen.kyuseido.org/p31.html> 参照。)

レムリアは“太陽の帝国”とも呼ばれ、ほとんどがナーガ族という種族だったという。(http://page.freett.com/wolf_man/mcr/mokuji_at.htm 参照。) ナーガと言えばインドの蛇神であり、蛇神と言えば、エンキが原型である。そしてムーとは、シュメール語で“空飛ぶ機械”の意味であった。ならば、これもシュメールの第4の地域を曲解したものに過ぎない。また、1912年にチベットの都ラサの仏教寺院にある古写本「ラサ記録」にもムーの記録があると言われたが、後にこの話は捏造であることが判明した。

(<http://www.nazotoki.com/mu.html> 参照。)

つまり、“大いなる誤解”に基づく解釈を、神智学者たちがいいように利用した結果、レムリアやムーという“妄想”が一人歩きすることになったのである。

“建築と航海術に優れており、太陽の象徴を旗印にして世界の海を航海していた”という特徴は、どこかの民族に良く似ている。また、存在していたと言われる太平洋の領域は環太平洋火山帯であり、ハワイに見られるように、常に地殻活動が盛んである。そんな所に、巨大な大陸は断じて存在し得ない。それに、“地下のガス・ベルトの爆発”により一夜にして海中に沈んだとしたら、その大陸の残骸は何処へ消えたのか。これも、環太平洋火山帯に結び付けられた誤解である。あるいは、ペシャンコに潰れたという説もあるが、それならば大陸の中は空洞だったことになり、とても不安定な地殻状態で、大文明が築けるような地盤ではない。そして、元来1つの大陸だった、というのは、太古の Gondwana 大陸のことである。

よって、レムリアとムーも、アトランティス同様、空想の産物であり、架空の文明である。古代のロマンは消えてしまったが、事実は事実として認識しなければならない。

以上のことから、アトランティス、ムー、レムリア、いずれも偶像崇拜の悪魔主義者＝サタニストの神智学者が中心となって動いていることが解る。神智学の祖ブラヴァツキーで有名なのは、7つの基本種族による宇宙進化論である。それによると、地球上には7つの基本種族が出現することになっている。第1の種族は目に見えない存在。第2はかつて北極にあった大陸（ハイパーボリア）に住み、第3はレムリア人である。彼女は著書「秘密の教義」の中で、インド洋の仮想大陸レムリアをアトランティスと結び付けた。それによると、レムリア大陸に現れた4番目の“根源人種”は人類に似たアトランティス人で、5番目は現在の人類らしい。そして第6、第7の種族へと進化した後、人類はこの地球を去って宇宙へと発展すると彼女は説いている。

(<http://www.gakken.co.jp/mu/library/wsinpi.html> 参照。)

当然、これはサタニ意識によるオカルト、マインドコントロールである。そして、これこそが、現在の様々なチャネリング情報の根源となっていることが、よく解るだろう。そうすると、やはり前述の聖書の言葉は正しい。

“女の祭司や霊媒師、口寄せは必ず死刑に処せられる。”

また、これを基にして、人類は過去に何度も高度な文明を築いたが核戦争等で破滅したという妄想が発生したのである。そして、第4の“神聖”な地域と結び付き、そのような戦争で生き残った者たちが地底などに避難し、現在は理想郷（＝シャンバラ）とも言える高度な文明を築いているという誇大妄想となったのである。本当のシュメールの「神々」ならば、チャネリングなどという方法ではなく、実体を伴って現れるはずである。しかし、まだ“その時”ではないので、現れることはない。

だから、地底人を見たという目撃談や、UFOに乗せられて金髪碧眼の宇宙人に導かれたなどという体験談は、チャネリングによってサタニ意識が潜在意識に働きかけることによる、幻覚や妄想に過ぎないと言える。あるいは、三百人委員会によるマインドコントロールと言える。ブラヴァツキー自身は、古代エジプトのイシス－オシリスカルトを基本としており、マルドゥクによるでっち上げと偶像崇拜が根本なのである。なお、サタニ意識は、三次元空間に存在する目に見えない邪悪な意識（霊体）や電磁波のことであり、この場合の地底人とは、チベットの山奥とかカリフォルニアのジャスタ山の地下などのことであり、両極のことではない。

このような背景を知らずして、アトランティスなどの古代文明や地底王国、金髪碧眼や爬虫類系の宇宙人を信じることなど、危険極まりない行為である。

仮に、これらの古代文明があったとされる場所、あるいはもっと他の場所でも遺跡などが発見されたらどうするのか。

それは、いずれもシュメールの「神々」が、中東以外の地域に築いた「神々」

の拠点という解釈で充分である。そしてエンリル一族とマルドゥク一派による戦いにより、あるいはニビルの接近に伴う洪水などの大変動により、壊滅したと考えれば良い。いずれの文明も崩壊年代を見ると、ノアによる統治の頃にびったり一致する。

7:まとめ

- ・神話・伝承は基本的に改竄されているが、それはマルドゥクによるものである。
- ・マルドゥクが改竄した神話・伝承によって人類の誤解が生じ、実際に人身供儀や姦淫、性的退廃が行われるようになった。偶像崇拜の根源はマルドゥクが拝ませていたベンベンである。人身供儀は、イナンナの行っていた“聖なる結婚”の儀式が曲解されていったものである。マルドゥクが主神となって以後、偶像崇拜と人身供儀が重なったカナン地域と民族は、主から忌み嫌われ、呪われた。この2人がサタン、ルシファーの根源である。
- ・旧約の“主”を意味する“アドーナイ”は、愛するドゥムジをイナンナが呼ぶ言葉であり、新約のイエスはマルドゥクの奸計によって死んだドゥムジが原型である。つまり、旧約の“主”と新約のイエスが象徴的に同一となる。
- ・天照大神は太陽神の象徴としてはウツ、本来のイエスの原型としてはドゥムジ（とイナンナ）である。
- ・スサノオが八岐大蛇を退治した際、尾から草薙の剣を見つけ、天照大神に献上した話は、王位正統継承権はマルドゥクではなくドゥムジにあり、実際のシュメールの王の系統は、象徴的にドゥムジに重ねられるウツの子孫から始まった、ということを示している。つまり、太陽神ウツの系統が天孫の系統、ということである。
- ・王位継承数字的には、イナンナの15を挟んで（生きていれば）ドゥムジ、ウツ共に20であり、イナンナを中心として2人が象徴的に同一である。つまり、ドゥムジとウツは象徴的に同一と見なすことができ、両者の象徴を重ね合わせることができるので、イナンナ＝金星＝ウツ＝太陽神＝イエス＝ドゥムジとなる。また、イナンナをスサノオとして中心の鼻、ドゥムジを月読命として右目、ウツを天照大神として左目に配していることに反映されている。
- ・フェニックス＝不死鳥伝説の大元はエジプトではなく、ナツメヤシのことである。ナツメヤシは「生命の樹」の原型であり、イナンナの好物だった。そして、イナンナ－ナツメヤシ－フェニックス－乳香－復活という明確な繋がりがあり、ナツメヤシの赤紫－赤い経帷子、赤い外套－ドゥムジ、イエスという象徴も重ねられる。つまり、フェニックスの不死鳥伝説には、ドゥムジ

の“復活”が重ねられている。

- 東方の三博士とは、ドゥムジを祝福するイナンナ、エンキ、ニンギシュジツダの象徴である。彼らが持参した没薬、乳香、黄金はそれぞれドゥムジ、イナンナ、アヌを象徴する。
- ロスチャイルドらカナン人の末裔は偶像崇拜の悪魔主義者（サタニスト）であり、世界を裏から牛耳っている。
- アトランティスなどの超古代文明や地底王国などは存在しない。これらの概念は、爬虫類人類などと同様に、三百人委員会のオカルト部門の総帥ブラヴァツキーやクロウリー、シュタイナーを祖とする神智学者によるものである。これらは、改竄された神話・伝承が更に曲解されたことによる誇大妄想にすぎない。
- 神智学の情報は、チャネリングというイカサマによるものである。よって、神智学が根源となっているフォトンベルト、覚醒、次元上昇なども実際にはあり得ない、危険なオカルト的マインドコントロール＝黒魔術である。

参考著書：

- ゼカリア・シッチン著、「人類を創成した宇宙人」、徳間書店。
- ゼカリア・シッチン著、「神々との遭遇 上・下」、徳間書店。
- ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。
- 造事務所編著、「「天使」と「悪魔」がよくわかる本」、PHP 文庫。
- 造事務所編著、「「世界の神々」がよくわかる本」、PHP 文庫。
- 学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「古代秘教の本」
- 学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「神秘学の本」
- 学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「ヒンドゥー教の本」
- 学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「チベット密教の本」
- 学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「道教の本」
- 学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
- マービン・マイヤー著、「イエスが愛した聖女 マグダラのマリア」、日経ナショナル ジオグラフィック社。
- カレン・L・キング著、「マグダラのマリアによる福音書」、河出書房。
- ロドルフ・カッセルら共著、「ユダの福音書」、日経ナショナル・ジオグラフィック社。
- デーヴィッド・アイク著、太田龍訳、「大いなる秘密 上・下」、三交社。
- 中丸薫著、「この地球を支配する闇権力のパラダイム」、徳間書店。
- バーバラ・マーシニアック著、大内博訳、「プレアデス+かく語りき 地球 30 万年の夜明け」、太陽出版。

- ・バーバラ・マーシニアック著、大内博訳、「プレアデス+地球をひらく鍵」、太陽出版。
- ・バーバラ・ハンドクロウ著、高橋裕子訳、「プレアデス 銀河の夜明け」、太陽出版。
- ・バーバラ・ウォーカー著、山下主一郎主幹・共訳、「神話・伝承事典」、東京・大修館。

初版：2009年4月

改定4版：2012年10月

改定5版：2012年12月

★付録：フォトンベルトについて

フォトンベルトの概略は、次のようなものである。

- ・太陽系はプレアデス星団のアルシオネを中心として約 26000 年周期の螺旋軌道で公転し、近づいている。
- ・フォトンベルトはアルシオネから放射され、そこから垂直に分布しているという主張と、銀河の中心から放射されているという主張がある。この場合のフォトンとは、生命体を高次元への存在へと変容（アセンション）させる、高次元の波動を有するマイクロ波的な光の粒子である。
- ・太陽系はフォトンゾーンに 2000 年、それ以外の宇宙の暗黒内に 11000 年存在し、半期で計 13000 年、1 周期で 26000 年である。
- ・フォトンベルトに先行して、完全に電磁場の存在しないエネルギー的な真空ヌルゾーンに突入する。このゾーンでは、3 日間ほど闇に覆われ、電子機器などが使えなくなる。
- ・地球は公転軌道の関係でフォトンベルトに一時的に入ったり出たりしているが、2012 年 12 月の冬至には完全に突入する。

フォトンベルトの情報を得たのは 10 年ほど前であるが、かなり疑問に思っていた。参考とした原本はプレアデス関連の一連の著書（バーバラ・マーシニアック、バーバラ・ハンドクロウ）である。これらの著書では、イエスの磔は三次元に挿入されたホログラムであって存在しなかったこと、プレアデス星人（アルシオネの意識）が地球人を導くことなど、信じがたいことが書かれている。しかし、神道の本質が判明してイエスの磔が実際にあったこと、プレアデスのアルシオネはイルミナティのラッセル家が信奉している神＝サタンであること、プレアデス関連著書の予言では、天文学などを全く理解できず、“チャネリングのような偽りの情報”に頼っている人たちなのでことごとく外れていることが解ったので、これらの著書の信憑性はまったく無い。

しかし、近年、フォトンベルト論がにわかに注目され始め、2012 年に向けて様々なメディアを通じて宣伝されることが予測される。そこで今回、天文学の見地から真面目に検討し、如何に誤った概念なのか、曝露する。

当然の事ながら、フォトンベルトなどというものは存在しない。以下、その理由を示す。

(<http://blog.goo.ne.jp/heywa/c/d4ef83f07e895e6ec2d74b79af2da120> 参照。)

(1) 太陽系がアルシオネの周りを螺旋軌道で周り、近づいている。

まったくの嘘である。プレアデス星団は 410 光年の距離にある。その動きは 2 つの要素がある。1 つは視線の前後方向に沿った動きで、もう 1 つは視線に垂直な動きである。前者は視線速度、後者は固有運動と言う。プレアデス星団の視線速度は毎秒 7.2km 後退となる。つまり、太陽とプレアデス星団はお互いに遠ざかりつつある。プレアデス星団の固有運動は 100 年で 5.5 秒であり、天空上ではおよそ南西方向＝オリオン座に向かっている。その移動速度は、次のよう

になる。

簡単のために、太陽系がアルシオネの周りに円形軌道を描いて公転しているとする。そうすると、その円周は $2 \times \pi \times 410 = 2575$ 光年 $= 2.4 \times 10^{16}$ km となる。太陽がアルシオネの軌道を 1 周するのに約 26000 年 $= 8.2 \times 10^{11}$ 秒とあるから、太陽系がアルシオネの周りを公転する速度は、

$$(2.4 \times 10^{16} \text{ km}) / (8.2 \times 10^{11} \text{ 秒}) = 30000 \text{ km/秒}$$

となり、光速 (300000 km/秒) の約 10 分の 1 となる。地球が太陽の周りを公転する速度は約 30 km/秒だから、その 1000 倍というもの凄い速度となる。これほどの速度で移動していれば、星座の配置などが刻々と変化するはずであるが、そんな現象は見られない。

また、この速度で移動しているとする、アルシオネは巨大な質量でなければならない。対象物の軌道 (円形軌道と仮定) の速度 v は、 G : 重力定数、 M : 質量、 R : 半径とすると、 $v^2 = GM/R$ で求められる。太陽が 410 光年の距離を上記速度でアルシオネの周りを公転しているとした場合、そのとき中心 = アルシオネに必要な質量 M は、

$$M = 410 \text{ 光年} \times (3 \times 10^7 \text{ m/s})^2 / (6.668 \times 10^{-11} \text{ m}^3/\text{kg} \cdot \text{s}^2) \\ = 5.24 \times 10^{43} \text{ kg}$$

となる。太陽の質量は 2×10^{30} kg だから、これは太陽の約 26 兆倍という巨大な質量を有する天体となる。通常から考えると、約 1 万個の銀河の質量に相当し、そうでなければブラックホールである。プレアデス星団は青く輝いているので、星の年齢としては若い。そのような星が、このような巨大な質量を有することは断じてあり得ない。

(2) 太陽系は 26000 年周期でアルシオネの周りを公転し、フォトンゾーンに 11000 年毎に入り、それから 2000 年間フォトンベルト内を通過する。

天文学上の証拠は何も無い。太陽系は銀河系の中心を約 2 億 5000 万年かけて公転している。銀河の中心は、プレアデスとは反対側のいて座、サソリ座の方向にある。

26000 年周期というのは、地球の歳差運動周期と完全に混同している。また、関連して太陽が黄道 12 星座を 26000 年掛けて 1 周する図 (巻末添付) が掲載されているが、これも根本的に間違っている。これは、太陽が 1 周するのではなく地球が太陽の周りを公転しているため、夜空に見える星座が季節によって変化するだけのことである。太陽系自体がこのような運動をするような、誤解を与える図であり、義務教育レベルの天文学 (理科) をまったく理解していないようである。

(3) フォトンベルトは銀河の中心から放射され、銀河の自転によって銀河内に降り注いでいる。

銀河の中心から莫大なエネルギーが放出されていることは観測済みだが、フォトンではなく、強力な X 線などの電磁波のようであり、これと混同している。
また、そのようなエネルギーが銀河に降り注いでいるとしても、銀河の自転によってではなく、銀河の重力や電磁場によってであり、自転によってそのような電磁波エネルギーが曲げられることはあり得ない。

また、フォトンベルトが銀河中心から放射されているとすると、太陽系は銀河の中心に対して公転している（銀河が自転している）から、フォトンベルトは銀河系内に規則的に分布していることになる。すると、アルシオネもフォトンベルトに入ったり出たりするはずだが、アルシオネはずっとフォトンベルトに浸っている、とあり、矛盾しているし、アルシオネからフォトンベルトは放射されている、という主張とも相容れない。

仮に、銀河中心から放射されるフォトンゾーンに 11000 年毎に入り、それから 2000 年間フォトンベルト内を通過すると仮定する。太陽系の銀河中心に対する公転速度は 2 億 5000 万年前後であるから、26000 年をフォトンベルト浸入の 1 周期と見なした場合、1 周期分は単純計算で銀河系内を角度にして約 1 万等分する計算になる。簡単のために銀河系が円であると仮定すると、その角度は 0.036 度となる。この割合でフォトンベルトに入ったり出たりしているとすれば、銀河系内はほとんどすべてフォトンベルトで覆われていることになる。

また、銀河系の直径は約 10 万光年だから外周は約 30 万光年である。太陽系は銀河系の端にあるから、銀河中心に対して 1 回公転する距離はほぼその外周距離と見なしてよく、銀河の中心に対して 26000 年で公転しているならば、その公転速度は約 12 光年/年となる。光が 1 年間に移動できる距離が 1 光年だから、これは光速の約 12 倍の速度ということになり、光速を超える速度の大発見である！！？しかも、それが地球を含む太陽系なのだ！？

よって、銀河中心からフォトンベルトが放射されていることはあり得ない。

(4) ヌルゾーンの存在

ヌルゾーンが存在するならば、近年の宇宙のマイクロ波背景放射に関する数々の調査で確認されるはずであるが、確認されていない。つまり、電磁気ヌルゾーンは存在しない。世界各国で観測しているわけだから、すべてが三百人委員会によって封印されることはあり得ない。

(5) フォトンによる変容（アセンション）

フォトンベルト理論が正しいとすれば、既に地球は 1 年の内の一定期間、フォトンベルトに浸っているはずであるし、ヌルゾーンも通過しているはずである。しかし、人間は何も変化していないし、地球も大変動しているわけではな

い。異常気象や人間の異常な行動等をすべてフォトンベルトに関連付けるのは非常に強引で、ご都合主義的な考え方である。

また、物理学的にはフォトン光子であり、それ以上でもそれ以下でもない。だから、マイクロ波的な粒子であるというのも納得できかねる。前述のマイクロ波背景放射は全天に均等に広がっているから、宇宙全体に広がるマイクロ波背景放射と完全に混同している。それに、マイクロ波の代表的なものは電子レンジや携帯電話であるから、フォトンによる変容が真実であるならば、日々マイクロ波を浴びている人類は既に変容しているはずである。

更に、周波数の高い粒子ならば、それは物理的にフォトンとは異なる別の粒子という定義になるし、周波数の高い粒子を浴びたら、生物体内の水分は沸騰し、遺伝子を構成する塩基の結合も切れてしまい、生存できない。

よって、フォトンによる変容（アセンション）はあり得ない。また、アセンションについても、5：(3)で述べた通り、あり得ない。

以上のことから、フォトンベルトの存在は完全に否定される。そもそも、この概念自体、ニューエイジ運動から発生しており、極めてカルト的な宗教的概念である。

太陽がプレアデス星団の周囲をめぐる、そこから出ているフォトンベルトに出たり入ったりするという観念は、ドイツ人パウル・オットー・ヘッセに端を発し、ヴァージニア・エッセンや二人のバーバラが影響された。更に、1991年の夏に、ロバート・スタンレーが「フォトン・ゾーン—地球の未来は輝く」という記事を「Unicus Magazine」で発表し、フォトンベルトの概念が爆発的に広がった。このロバート・スタンレーというのは天文学者などではなく、現在「Unicus Magazine」という雑誌の編集長をしている人物である。スタンレーは子供のころからUFOに関心を持ち、様々な不思議な体験をしたそうである。

(<http://blog.goo.ne.jp/heywa/d/20060703> 参照。)

またマヤ暦との関連についても、フォトンベルトによる地球の大変動を期待する人々によって、フォトンベルトと2012年が結びつけられたに過ぎない。これは、プレアデス星団にマイア=マヤという恒星が存在するためであろう。フォトンベルト妄想の出発点であるヘッセなどは、1999年あるいは2000年に何事かが起こるはず、と期待していたが、空振りに終わったので、次に選ばれたのが2012年というわけである。

フォトンベルトを肯定するなら、ここに挙げた点について、すべて理論的に反証できなければならないが、それは不可能である。

フトンベルトと春分点歳差

